

人祖論

二

7
3
///

(M)

人祖論

神津專郎纂譯

第一卷

館 書 圖 京 東

類 書 圖 京 東

三				
三册	号	三架	七函	屬類



三〇四七

人祖論卷之二目錄

卷之一

第一編 人類ノ祖先ノ獸類ヨリ出シ證ヲ論

ズ

○證據ノ性質ヲ論ズ

○人獸身體造構ノ符合スル所以ヲ論ズ

附 人獸符合ノ雜證ヲ論ズ

○人胚ノ暢發ヲ論ズ

○身體造構、肉筋、五官、毛髮、骨骸、生殖機等ノ不

具ヲ論ズ

人祖論卷之二目錄

○結論

人祖論卷之一目錄終

人祖論卷之二

英國 查爾斯駝韻 著
日本 神津專三郎纂譯

第一編 人類ノ祖先ノ獸類ヨリ出シ證ヲ論

證據ノ性質ヲ論ズ
人類ノ祖先ノ或ル既ハ獸類ヨリ出シ所以ヲ究
察セント欲スル者ハ宜シク先ヅ人類ニ身體造
構及ビ本智心カノ變化アリヤ如何ヲ明カニシ

而ノ其多少ヲ論ゼズ若シ果ノ然ルアラバ則チ此變化ハ獸類ト同一ナル規則ニ由テ其子孫ニ遺傳スルヤ如何ヲ審カニスベシ又吾人ノ識見ヲ以テ之ヲ斷了スレバ此等ノ變化ハ世々體部ノ使用不使用ノ結果連發變化等ノ如ク均シク是レ獸類ト同一ナル原由ヨリ來ル成果ニノ而ノ同一ナル規則ノ為ニ管理セラレ者ナリヤ如何人體ノ不具ナル部分ハ暢發ノ停止體部ノ重複等ニ係ル結果ナリヤ且人體造構ノ定法ニ合ハザルモノハ古格ニ回復セル復古造構ナリ

ヤ否ヤ人類マタ他ノ生物ト等シク或ハ少シク變シテ變種若クハ分種トナリ或ハ大ニ變ジテ本末不分明ナル人種トナル者アリヤナシヤ此ノ如キ人種ノ何ニノ天下ニ散布シ且其雜種ヲ生ジタランニハ子々孫々ニ及ボス何ナル影響ヲ彰スベキヤ是レ皆究明セザルマカラザル者ナリ

次ニ研究スベキ要件ハ人類ノ増殖セシ事情ナリ蓋シ生物ハ増殖迅速ナルハ則チ生計ハ困難ヲ來セリ生計困難ナルハ必ズマタ營生ノ

戰鬪アリ、營生ノ戰鬪ハ天然ノ撰擇ニ馴致セリ、
 何ニトナレバ生物愈カ鬪スレハ心身愈變化シ、
 然ハ此變化ハ有益ナル者ハヨク保存セラレ、有
 害ナル者ハ却テ消除セラルハニ至レバナリ、人
 口増殖モ亦然リヤ如何、且人類諸種族ノ相互ニ
 吞噬侵奪シ或ハ以テ遂ニ滅セシ者ナレヤ否
 ヤ、ナホ此ノ如キ條件ハ枚舉ニ遑アラズ、抑此等
 ノ問題ハ答意自カラ分明ナル者ニシテ、其情態ナ
 ホ獸類ニ於ケルガゴトシ、然レモ此等ノ諸件ニ
 涉ル議論ハ姑ラク之ヲ舍キ、亦人獸二類ノ心力

比較モ更ニ之ヲ下編ニ譲リ、先ヅ人體造構ノ據
 ルベキ何如ヲ審カニシ、人類ノ獸類ヨリ逸進セ
 シ所以ヲ證明セント欲ス、

人獸身體造構ノ符合スル所以ヲ論ズ
 附人獸符合ノ雜證ヲ論ズ

驚クベキハ人體ノ造構ナリ、模倣一ニ他ノ哺乳
 類ニ同ジク、骨骼盡ク猿、猴、蝙蝠、海狗ニ符合セリ、
 肉筋、神系、血管、臟腑モ亦然リ、哈屈禮及ヒ其他ノ
 諸大家ニ據リテモ、機關中最高ノ位地ヲ占ル腦
 漿マタ同法ニ由レリ、抑微書弗ノ如キハ、
 對

〇千八百六十
 八年印行人腦
 迂曲論第九十
 六葉

且論 卷一 三〇

○千八百六十
六年印行生理
論第八百九十
葉

論者ナリト雖モ、ナホソレ人類ハ腦漿ト高等猿
類ハ腦漿ト高低迂曲ハ彷彿タルハ堅ク信シテ
疑ハズ、且其言ニ曰ク暢發ハ際ニ腦眞ニ同一ナ
ルトナシ、マタ其然ルベキ所以ヲ知ラズ、若シニ
腦眞ニ然ルホハ二種ハ動物心カヲ同ウモザル
ベカラズト、婆耳比安[○]マタ人類ハ腦漿ト高等
猿類ハ腦漿トハ殆ソド異ナラザル者ニ、而モ
人類ハ腦質ハ猿類ハ腦質ニ密似スルハ、猿類ハ
他ハ哺乳類及ビ四足類ニ於ケルト日ヲ同ウシ
テ論ズベカラズトイヘリ、實ニ此貴重ナル腦漿

○對他林德西
氏千八百五十
八年七月
不家畜醫事誌
ニ於テ之ヲ論
シ、後千八百七
十一年心學雜
誌中更ニコ、
ニ論及セリ、

及ビ身體諸部ノ造構ヲ以テ人猿符合スル所以
ハ最モ分明ニ、マタ喋々スルヲ要セザル者ナ
リ、
然リト雖モ、ナホ身體ノ構成ニ間接シテ人猿ノ
倫理ヲ審明スル所以ノモノアリ、今コ、ニ其二
三ヲ舉ゲ以テ更ニ證スル所アラントス、蓋シ人
類ノ數、患フル避水症、痘瘡、馬鼻流涎症、花柳症、虎
列拉、癩、疥等[○]ノ諸症ハ、或ハ之ヲ獸類ニ傳染スルヲアリ、是
スルヲアリ、或ハ之ヲ獸類ニ傳染スルヲアリ、是
ニ由テ之ヲ觀ハ、至微ハ造構、至小ハ成立物ニ

④千八百七十一年八月一日
 印行映國四季
 評論第四百七
 十二葉ニ之ヲ
 難ズル者アリ
 然レバ二種ノ
 生物ニ同一ナ
 ル傳染病ノ同
 一ナル成果ヲ
 生ズルト、二種
 ノ水液ニ同一
 ナル逆藥ノ同
 一ナル成果ヲ
 生ズルトハ其
 相類似スルト
 コロアルヲ覺

至ルマデ肉網血液ヲ以テ人獸④ハ符合スルハ
 何ゾ智者ニハ然ノ後知ルヲ待ンヤ之ヲ顯微鏡
 ニ照シ之ヲ分析術ニ屬シ以テ比較研究スルハ
 遠ハコハニ及バザルベシ然リ而シテ猿類マタ人
 類ト同一ナル諸般ノ不染症ヲ患ヘリ蓮茅⑤多
 年南亞米利加ニ於テ「ジーバス、アザリ」ヲ觀察
 セシニ風邪ヲ患フル者アリ其徵候人類ニ異ナ
 ラズ數發作ヲ以テ癆症ニ變ゼルアリ此等ニマ
 タ中風、痔疾、内障ヲ病ム者アリ子猿ハ諸難ノ更
 替ニ際シ數熱ヲ以テ死スルアリ服藥ノ效驗マ

④千八百三十一年印行巴羅
 註哺乳類論第
 五十節
 ⑤更ニ下等ノ
 動物ニマタ之
 ヲ好ム者アリ
 尼哥爾斯氏嘗
 テ豫州格印斯
 蘭ニ於テリス
 コラーククス
 シ子ニトシ
 三匹ヲ養ヒシ
 ニ致テ教ヘタ
 ルヲモナカリ
 シガ非常ニ糖

タ人類ニ同ジ猿類ニ多ク茶、珈琲、蒸溜酒ヲ好ム
 アリ、余ガ嘗テ目撃セシ者ハ好ンテ烟草ヲ吹ケ
 リ⑥貌廩ノ説ニヨレバ、東北亞弗利加ノ土人ハ
 精製麥酒ヲ器ニ盛リ之ヲ野猿ニ放與シ以テ酪
 酏セシメ其機ニ乘シテ之ヲ獲ヘリ同氏カ嘗テ
 籠中ニ飼養セシ者ノ酏醉シテ身體ヲ動亂シ面
 顔ヲ變作セシメシ事等ニ係ル珍談ハ、抱腹ニ堪
 ヘザル者アリ然ノ爛醉シタル猿類ハ翌朝ニ至
 リ何レモ鬱々トシテ樂マズ、両手ヲ以テ頭痛ヲ
 扶ケ、惘然タル憂色アリ、サラニ之ニ與フルニ麥

水酒及ビ煙草ヲ好ム者トナリシトイフ、
 ④千八百六十四年印行、
 動物略傳第七十五卷八十六、
 前アテルズハ、
 第百五節、其他ノ諸例ハ、
 十五卷百七節ヲ見ユ、
 ⑤千八百五十八年七月印行、
 林徳西壺丁不家者醫華誌、
 十三葉ヲ見ユ、

酒、葡萄酒等ヲ以テスト雖モ避テ之ヲ顧ミズ、
 ヲ檸檬酒ヲ味ヒシノミナリトイフ、
 ⑥、マタアテ
 ルストイフ、
 以後ハ、決シテ之ニ觸ルコトナシトナリ、
 苟モヨク此ノ如キハ、
 其智人類ハ上ニ出ズ、
 斯ル事實ハ、
 味ノ感官及ビ全體ノ神系悉ク人類ニ符合スル
 所以ヲ證セリ、
 人類ハ内部外部ニ於テ寄生蟲ノ為ニ危篤ノ大
 患ニ罹ルコトアリ、
 是レ悉ク他ノ哺乳類ヲ害スル
 者ト同種類ニシテ、
 特ニ疥症⑦ニ至リテハ一ニ同

⑧千八百四十二年印行、
 英國社雜誌中、
 橋氏ノ定期死生ノ總法ヲ論ズル文ヲ見ユ、
 ○學士馬久路、
 橋管テ狗ノ瘡ニ罹リシ者ヲ見シトイフ、
 西聖曼氏編輯此米學術雜誌、
 十七卷第百五葉、
 ⑨養馴動物、
 進論、
 二卷、
 十五葉ノ諸證

物ナリ、且哺乳類、飛鳥類、昆蟲⑧類ト同ジク、
 妊娠或ハ他ノ疾病ニ罹リ其愈ルト愈ザルトハ、
 不思議ノ法則ニ由テ必ズ一定ナル時限ヲ以テセリ、
 傷疵モ亦同方ヲ以テ療スルヲ得、
 四支ヲ截斷シタル切口ノ如キハ、
 最モ下等ノ動物ニ同ジク、
 屢復生ノ精力ヲ有スルアリ、
 殊ニ成胚ノ始ヲ以テ然リトス、
 ⑩、
 蓋シ生物至要ノ大件ナル生殖ノ方法ハ、
 男子ノ眷戀愛慕⑪ヲ始トシテ、
 嬰兒ノ出產保育ニ至ルマデ、
 哺乳類ヲ舉テ其情ヲ一ニセリ、
 猿子ノ出產

人且論 卷一 六〇

① 參政セヨ、
 ② 安德龍斯美
 ③ 斯由冠的狼鹿
 ④ 久未等諸氏ノ
 ⑤ 說アリ之ヲ略
 ⑥ 千八百二十
 ⑦ 四年印行哺乳
 ⑧ 類論夢一卷中
 ⑨ 飽弗禮仙實禮
 ⑩ 匪及ビ久未ノ
 ⑪ 狗頭猿類及ビ
 ⑫ 似人猿類ニ係
 ⑬ ル說ニ據レリ
 ⑭ 千八百六十
 ⑮ 三年印行哈屈
 ⑯ 禮人類天籟考

セルヤ、助ケナク守ナキ其情憫然ニ堪ヘザルハ、
 恰カモ人類ノ小兒ノ然ルニ異ナラズ、猿類ニ幼
 猿ノ容貌ノ老猿ニ異ナル種類アリ、ナホ人類ノ
 小兒ノ大人父母ニ於ケルガ如シ、論者或ハ曰
 ク、人類ノ小兒ハ他ノ哺乳類ニ比スレバ其成壯
 ニ達スルヤ殊ニ遲シト、請フ試ミニ熱帶地方ノ
 人民ヲ視ヨ、其差豈大ナリトスベケンヤ、マタ聞
 ク、チラングハ十歳ヨリ十五歳ニ至ラザレバ未
 ダ成壯ニ達セズト、① 身體ノ大小、強弱、毛髮ノ有
 無、心力ノ銳鈍ニ至ルマデ、男子ノ女子ニ異ルハ、

第三十四葉
 見ヨ、

ナホ許多ノ哺乳類ノ二性相異ナルト同一ナリ、
 此故ニ骨格ノ造構、肉網ノ組織、元素ノ化合、身體
 ノ資質ヲ以テ人類ト高等獸類殊ニ猿類ト符合
 スルハ、最も密ナリト云フベシ、
 托馬斯、哈屈禮著人類天籟考ニ據ルニ、猿類中
 身體造構ノ概略ヲ以テ最モ人類ニ密似スル
 者ハ「パンジ」及ビ「ゴリ」ナリ、然リ而メ、
 今人類ト猿類トヲ照考スルニ、此二種ノ中孰
 レヲ以テスルニ、實際ニ於テ少シモ異ナルト
 コロナシ、然レモ、コハニ姑ラク便宜ヲ計リ、

リヲ以テ之ヲ照考スベシ、是レ雅俗兩種ノ著作ニ於テ人ノ普子ク其容體ヲ知レル所以ナリ、然ノマツ第一ニ、人類トゴリラトノ重要ナル異同ヲ論ジ、第二ニ、此異同トゴリラトノ他ノ猿類ニ於ケル異同トヲ詳カニスベシ、蓋シゴリラト人類ト差異ノ一目シテ判然タル者ハ體ト肢トノ比例ナリ、ゴリラノ頭顱ハ人類ヨリ小ニシテ軀幹ハ之ヨリ大ナリ、足ハ之ヨリ短クシテ手ハ之ヨリ長シ、哈氏嘗テ英國大學校外科門ノ博物館ニ屬スル成壯ナル

ゴリラノ骨格ヲ查察セシニ、其脊骨ハ頸部第一骨節ヨリ臀部極端ニ至リ、其長二十七英寸ナリ、手ハ手首ヲ除キ其長三十一英寸半ナリ、足ハ足首ヲ除キ其長二十六英寸半ナリ、手首ハ其長九英寸及ビ四分ノ三ナリ、足首ハ其長十一英寸及ビ四分ノ一ナリキ、今此寸法ヲ化シテ脊骨ノ長ヲ一百ト定ムルハ、手ハ百十五ニ當リ、足ハ九十六ニシテ、手首ハ三十六トナリ、足首ハ四十一トナルベシ、
タタ同館ニ屬スル薄斯惹斯人ノ男ノ骨格ハ

同法ニ由テ脊骨ノ長ヲ一百ト定メタルニ、其
比例ハ手長七十八、足長一百十、手首長二十六
足首長三十二トナリタリ、同上婦人ノ骨格ハ
手長八十三、足長一百二十ノ比例ヲナセシガ、
手足首ハ男子ト一様ナリ、而シテ白種人ノ骨格
ハ手長八十、足長一百十七、手首長二十六、足首
長三十五トナリタリ、
然レバ則チ足ト脊骨トノ比例ハ、
テモ人類ニ於テモ、外見ノ如キ差異ノ大ナル
モノニアラズ、
テモ人類ニ於テハ、足長脊骨長ヨ

リ少シク短ク、人類ニ於テハ其脊骨ヨリ長キ
ト十分一ヨリ五分一ニ至ル、
更ニ長ク、手首ハ更ニ更ニ長シ、然レモ二生物ノ
最モ異ナルトコロハ手ナリ、其長
テハ脊骨ヨリ非常ニ長ク、人類ニ於テハ之ヨ
リ非常ニ短シ、
次ニ
タ同法ヲ用ヒ脊骨ノ長ヲ一百ト定メ、以テ前
述諸件ノ差異ヲ究察セント欲セリ、蓋シ成壯
ナル

ハ其長九十ナリ、手首長ハ四十三ニシテ、足首長ハ三十九ナリ、故ニ手首長及ビ足長ハ人類ニ於ケル比例ト大ニ異ナリ、手長ハヤハ之ト等シク、而シテ足首長ハ殆ンドヨリテニ類似セリ、
ヨラングノ手長ハ一百二十二ニシテ、ヨリテヨリ甚ダ長ク、足長ハ八十八ニシテ、ヨリ短シ、足首ハ手首ヨリ長クシテ、其比例五十二ノ四十八ニ於ケルガ如シ、然レテ之ヲ脊骨ニ比スレバ、手足首トモニヨリテヨリ長シ、
他ノ猿類ニ於テハ此等ノ比例更ニ異ナリ、

ボシノ手長ハ脊骨長ト十九ノ十一ニ於ケル比例ヲナセリ、而シテ足長ハ脊骨長ニ勝ル、其三分一ナリ、故ニマタ人類ニ比シテモ短カラズシテ却テ遙カニ長シトス、手首ハ其長脊骨ノ二分一ニシテ、而シテ足首長ハヤハ、手首長ニ劣リ、之ヲ脊骨ニ比スレバ、殆ンド其長ノ十一分ノ五ナリ、
ハイロベートトノ手ノヨリテヨリ長キハ、ヨリテノ手ノ人類ヨリ長キト一様ナリ、然レバ其足ノ人類ヨリ長キハ、人類ノ足ノヨリテヨリ

ゆ

長キニ同ジ、故ニ四肢トモニ平均長ヨリ非常ニ異ナル者ハ此種類ナリ、
 「マ」ンドリルハ中間ノ位地ヲ存セリ、其手足ハ殆ンド同長ニノ孰レモ脊骨ヨリ短シ、而シテ首ト足首トノ比例ハ、之ヲ脊骨ニ比スルモ、之ヲ相互ニ比スルモ、ナホ人類ニ於ケルト一般ナリ、
 「ス」パイダ「レ」猿（アテルス）ハ其足脊骨ヨリ長ク、而シテ手ハ足ヨリ長シ、マタ彼ノ著名ナル「ロ」イン「種」ニ「イ」ンド「ラ」イ「リ」ガ「ノ」タ「ス」ト「イ」フ者

アリ、其足長ハ殆ンド脊骨ニ均シ、然レモ手ハ漸ヤク其長十八分ノ十一ニ及ベリ、手首ハ其長脊骨ノ三分一弱ニ足首ハ其強ナリ、
 此ノ如キ證例ハ枚舉ニ遑アラズ、然リト雖モ、四肢ノ比例ヲ以テ「レ」ガ「幾」何「ク」カ「人」類ニ異ナルトモ、ナホ他ノ猿類ノ「レ」ニ「異」ナルハ、更ニ大ナルトコロニ、到底此ノ如キ比例ノ差異ハ、決メテ「レ」ベ「キ」モノニ非ル「レ」ゾ、
 甚ダ明カナリ、
 ツギニ人類ト「レ」リ「ト」ノ「軀」幹ニ於ケル差異

人類論 卷一

十一

ヲ究察スベシ、所謂軀幹トハ脊骨ト之ニ連接
スル脊骨及ビ臀骨トヲ總稱セル者ナリ、
人類ノ脊骨ハ、一ハ脊椎ノ形狀ニヨリ、一ハ之
ヲ連接スル交節筋ノ彈力ニ由テ、其形弓字狀
ノ屈曲ヲナセリ、即チ頸部ニ於テ前ニ凸出シ、
脊部ニ於テ後ニ凹入シ、腰部ニ於テ更ニ前ニ
凸出シ、薦部ニ於テサテ後ニ凹入セリ、是レ
脊骨ニ彈力ヲ與ヘ以テ屈伸意ノ如クナラシ
メ、且直立行動ノ為ニ生ズル激動ノ脊推ニ通
ジ之ヲ浴フテソノ終ニ頭腦ニ波及スルヲ減

消スル所以ノモノナリ、
然ノ人類ハ通例頸部ニ脊椎七箇アリ、之ヲ頸
脊推トイフ、次ニ後背上部ヲナス者十二箇
アリ、即チ脅骨ノ由テ生發スル者是ナリ、其名
ヲ背脊推トイフ、次ニ腰部ニ脊椎五箇アリ、是
レ脅骨ヲ生ゼザル者ナリ、之ヲ腰脊推トイフ、
ツギニ薦部ニ脊椎五箇アリ、ミナ粘合シテ一
大骨トナレリ、且股腿骨ノ間ニアリ、臀骨ノ後
部ヲナシ、前部ハ鑿開セル者ナリ、之ヲ薦脊推
トイフ、ツギニ脊椎ノ數三箇若クハ五箇ニ甚

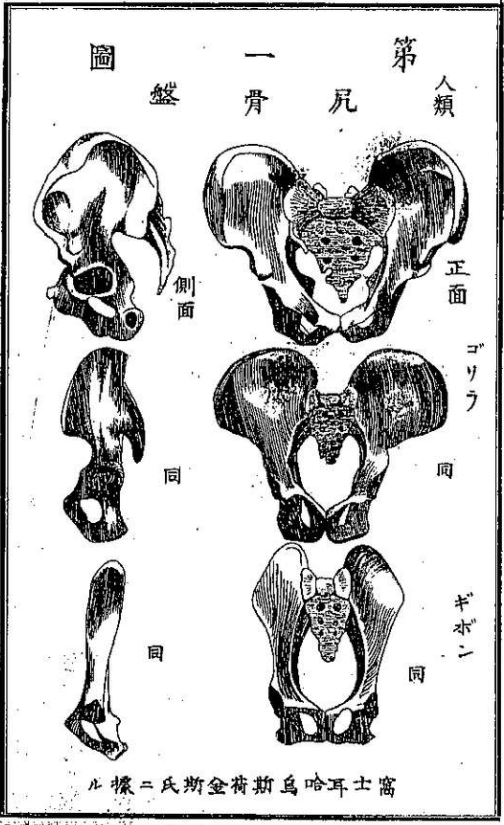
ダ微小ナルモノアリ、是レ脊骨ノ極端ニシテ多
少揺動セリ、之ヲ尾龍骨トイヘリ、即チ不具ナ
ル尾ナリ、
ゴリラノ脊骨ハマタ等シク分レテ頸部、背部、
腰部、薦部、尾部トナル、頸部及ビ背部ノ脊椎ハ
總計人類ト同數ナリ、然レモ腰部第一脊椎ニ
脅骨ノ匹生スルアリ、ゴリラニ於テハ之ヲ通
規トシ、人類ニ於テハ之ヲ例外トス、蓋シ脊椎
ノ腰部背部ノ名ヲ異ニスル所以ノモノハタ
ゞ脅骨ノ有無ニアリ、故ニゴリラノ背腰二部

ノ脊椎ハ總計十七箇ナリ、之ヲ分テバ背部十
三箇、腰部四箇トス、人類ノ背部ハ十二箇ニテ
腰部ハ五箇ナリ、
然レモ人類ノ脅骨十三對ヲ有スルハ啻ニ稀
有ノ例ニアラザルノミナラズ、ゴリラマタ數
此十四對ヲ有スルアリ、上ニイヘル博物館ニ
屬スル「フラングタン」ノ骨格ハ、背脊椎十二箇、
腰脊椎五箇ヲ有スルヲホ、人類ハゴトシ、マ
ター「ハイロベ」トノ此同數ヲ存スル者アリ
シ「久未」ノ説ニ係ル、然リ而シテ下等猿類中背

脊椎十二箇、腰脊椎六、七箇ヲ有スル者少シト
セズ、而シテ、¹「₁」ハ背脊椎十四箇、
腰脊椎八箇ヲ有シ、²「₂」(ステノプス、タルジ
グラダス)ハ背脊椎十五箇、腰脊椎九箇ヲ有セ
リ、
ゴリラノ脊骨ノ大略ヲ以テ人類ノ脊骨ニ異
ナルトコロハ、專ラ其屈曲ハ微小ナルニアリ、
中ニ就キ腰部ノ前部ニ凸出スル最モ微小ナ
リトス、然レモ其屈曲ハ情狀アルハ太大明カ
ナリ、而シテ其著シキ者ハ幼少ナルゴリラ及ビ

ゴリラノ脊骨ヲ以テ最トス、但シ此等
ノ標本ハ交節筋ヲ保存シテ整頓セル者ナリ
キ、然レモ同ジク整頓シタル幼少ナルゴリラ
ノ脊骨ニ、或ハ脊骨ノ鉛直ナルアリ、或ハ腰
部脊骨ノ前部凹入セルアリ、
此等ノ事情ニ據ルモ、或ハ頸部ノ比長ニ係ル
事情ニヨルモ、人類トゴリラトノ差異ハ之ヲ
ゴリラト其下等猿類トノ差異ニ比スレバ、敢
テシルベキモノハナキニ似カク、
人類ノ尻骨盤ハ人類特殊ノ形狀アリ、其左右

廣大ナルハ直立ノ位置ニ於テ腸臟ヲ支安シ、且人體ヲ直立セシムル所以ノ筋絡ヲ總括スルニ可ナル位地アラシムルヲ致セリ、是レゴリラト其趣ヲ異ニスル所ナリ(第一圖)然リト雖モ、サラニ照考スルニ「ギボン」以下ノ猿類ヲ以テセバ、此一造構ヲ以テモ「ギボン」ゴリラニ異ナルハ、其ノハ人類ニ異ナルハ、ハモ、甚シトス、「ギボン」ノ腰骨ハ扁狹ニノ穴口長隘ナリ、而シテ其尻ノ凸出スル部分ノ如キハ常ニ坐下ニ布カレ硬脆ヲナセリ、此ノ如キハ

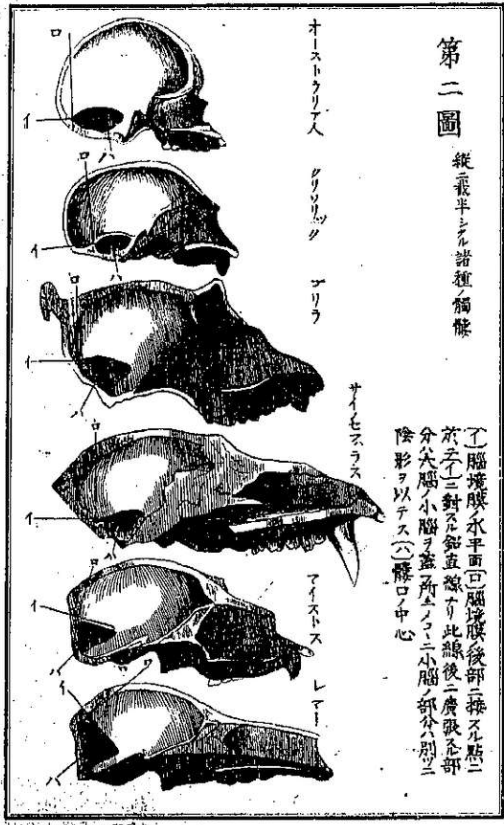


ゴリラ、シンプンジ、ゴラング等ニコレナキ
ナホ人類ニ於ケルガゴトシ、更ニ下等ノ猿
類及ビ「マ」ニ至リテハ差異ナホ甚ダシク
ノ、尻骨盤全ク四足類ノ形状ヲナセリ、
諸世人ノ往々人類ノ獸類ニ特別ナル所以ナ
リトスル機關即チ頭顱ニ論及スベシ、蓋シ「ゴ
リラ」ノ頭顱ト人類ノ頭顱トハ其差異素ヨリ
大ナリ、「ゴリラ」ノ面部ハ大ナル牙床骨ニ由テ
ナリ而シテ其骨延テ頭頂ヲ蓋ヘリ、人類ノ面部
ハ之ト造構ヲ異ニセリ、マタ頭腦ト全體ノ神

系ヲ連續スル大神系ノ通過スル體口ハ其位
 地人類ニ於テハ體底中心ノ直チニ後ロニア
 リ故ニヨク直立ノ位置ニ於テ左右前後ニ衡
 平ナリソノ「ゴ」リラニ於ケルハ體底ノ後部三
 分ノ一ニアリ加フルニ人體ノ表面ハ甚ダ光
 滑ニノ眉稜ヤ、低シ「ゴ」リラノ體底ハ冠骨ヨ
 ク暢發シ眉稜ノ眼窟ヲ廡フハナホ廢庇ノ窓
 口ヲ蓋フガ「ゴ」トシ(第二圖)
 孰「ゴ」リラノ體底ニ就テ其形狀ノ瑕疵ナリト
 スベキ者ヲ觀ルニ頭顱ニ缺損アルニアラズ

第二圖

縦垂半シテ諸種觸條



面部非常ニ暢發シテ頂部ヲ横領スルニアラズ、腦窩不形ナルニアラス、額面真ニ平坦ナルニアラズト雖モ、奈何セン頭顱ノ圓形ハ其後部ニ突出セル一骨ノ為ニ全ク敗レタリ(圖ヲ見ヨ)

且眼庇斜メニ頭頂ニ達シ前腦ノ下部ヲ縮略セリ、是ヲ以テ其腦窩ノ度量ハ迥カニ人類ノ下ニ出デタリ、聞クトコロニヨレバ、成人ノ腦窩ニ全積六十二立方英寸ヲ下ル者未ダ曾テ之アラズ、護耳東ガ查察シタル諸人種中至小

是レ一。目ニメ。人猿ノ腦窩度量ヲ異ニスルト
 コロナリ、然リト雖モ、サラニ觀察ヲ進メ、他ノ
 實事ニ由テ一層之ヲ精覈スルキハ、其真ニ然
 ラザルヲ知ルベシ、
 夫レ此實事ニ三件アリ、第一ニ、諸人種ノ間ニ
 於ケル腦窩ノ差異ハ、最下ノ人腦ト最高ノ猿
 腦トニ於ケル差異ニ比スレバ、實際上サラニ
 大ナリト雖モ、比較上殆ンド之ト同一ナリ、何
 ニトナレバ、護耳東ガ嘗テ精稱シタル最大ナ

ル人類ノ腦窩(一)四立方英寸ト其最小の(六
 二立方英寸)トノ差異(五二立方英寸)ハ、此最小
 的ノ最大(ゴリ)ラノ腦窩(三四五立方英寸)ニ於
 ケル差異(二七五立方英寸)ニ比スレバ、更ニ大
 ナリト雖モ、最大ノ腦ノ度量(一四立方英寸)
 ハ、ヤ、其最小の(六二立方英寸)ニ倍スレバ、ナ
 ン、第二ニ、嘗テ精稱セル成年ナル(ゴリ)ラノ腦
 窩ハ、最大ナル者ニテ三四五立方英寸ノ度量
 アリ、最小ナル者ニテ二四立方英寸アリ、其差
 即チ三分ノ一ナリ、第三ニ、大小ノ差ハ固ヨリ

アルベキモノトナシ、而シテホ下等猿類ノ腦
高度量ヲ以テ高等猿類ニ下ルハ高等猿類ノ
人類ニ下ルト殆ンド一様ナリ、

然レバ則チ此貴重ナル腦窩ノ度量ヲ以テ諸
人種ノ相異ナルハ人猿ノ異ナルヨリ甚ダシ
キ者トス、然レ最下等猿類ノ最高等猿類ニ異
ナル比例ハ、最高等猿類ノ人類ニ異ナルト一
様ナリ、其所以ハ「シミアン」屬ニ屬スル猿類ノ
頭顱ニ生ビシ他ノ變化ヲ究明セバ、更ニ之ヲ
詳カニスルヲ得ベシ、

抑「ゴリラ」ノ頭顱ヲノ面部ノ角度ヲ減シ、獸質
ヲ顯ハサシメシ所以ノモノハ、面骨ハ大ニメ
比例ヲ失スルト、牙床骨ハ非常ニ突出スルト
ニアリ、

然レモ今面骨ノ頭頂ニ於ケル比例ヲ觀ルニ、
幼少ナル「ゴリラ」ノ大ニ「ゴリラ」ニ異ナル
ハ、人類ノ「ゴリラ」ニ異ナルト一般ナリ、マタ「バ
ブロン」(サイノセスラス)ハ「ゴリラ」ヨリ口頭巨
大ニシ、其容貌ヤ、溫柔ナリ、「ゴリラ」ト「バブ
ロン」トノ差異ハ、愈々觀レバ愈々大ナリ、「ゴリラ」ノ面

骨ノ大ナルトコロハ、牙床骨ノ暢發ノ下向ナルニアリ、是レ即チ人類ニ密接スル所以ノ形質ニ、而シテ同部分ノ「マ」及ビ「マ」ニ在テハ、一向前ニ暢發シテ、獸類固有ノ形状ヲナス者ト別アルノ證ナリ（圖ヲ見ヨ）。

「マ」イストス「マ」及ビ「マ」ノ體口ハ全ク體底ノ後部ニアリ、即チ「マ」ニ於ケルヨリモマタ遙カニ後ロニアリ、其差ナホ「マ」ノ人類ニ於ケルガゴトシ、然レ「マ」マタ之ヲ以テ彼此ヲ區別スル憑據トナシ難キモノアリ、グリソル

クハ「マ」イストスト同ジク「マ」チライン即チ亞米利加猿中ノ一種ニ屬セリ、然シテ其體口ハ他ノ猿類ヨリ遙カニ前ニアリテ、殆ンド人類ト同一ノ位地ヲ存スレバナリ、

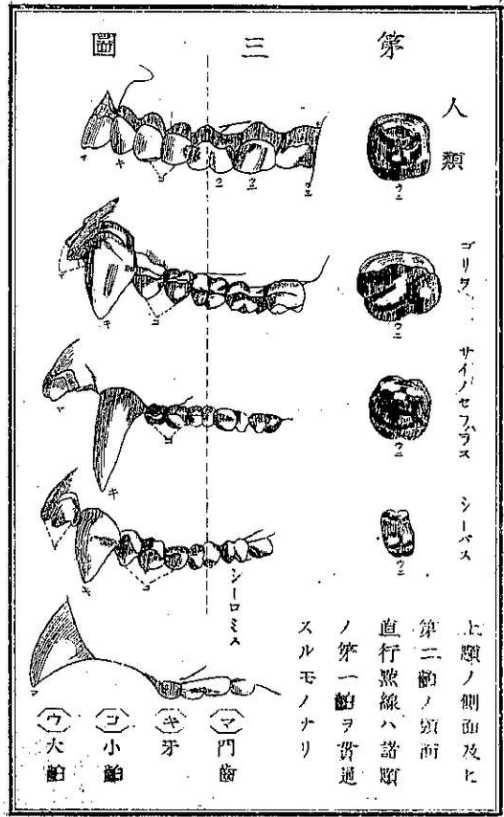
マタ「マ」ラングノ頭顱ハ眉上ノ非常ニ暢發スルモノナシ、其情ナホ人類ニ於ケルガゴトシ、然リト雖モ、其或變種ハ數、頭顱ノ他ノ部暢發セルモノアリ、且「マ」イン「マ」及ビ「マ」ノ中ニ、往々鬮髀ノ滑整ニシテ圓形ナル、宛モ人類ニ異ナラザルモノアリ、

以上ニ論ズル諸件ハ頭顱ニ係ル實事ノ大綱
 ニノ、ミナ之ヲ實際ニ徴セリ、自餘ノ諸件モマ
 タ然リ、是故ニ「ゴリ」ノ頭顱ト人類ノ頭顱ト
 ニ於ケル過不及ノ差異ハ、マタ悉ク「ゴリ」ト
 「ゴリ」以下ノ猿類トソ間ニ存セリ、然レバ則
 チ頭顱ハナホ骨格ニ於ケルガゴトク、人類ト
 「ゴリ」トハ差異ハ「ゴリ」ト他ハ猿類トハ差
 異ヨリモ更ニ少ナル者トハスベシ
 ツギニ照考スベキハ齒牙ナリ、コハ分類上必
 要ナルモノニテ、其數、其形、其順序ノ異同ハ、

ク戚族ノ倫理ヲ審カニスル、他ノ及デベキ
 トコロニアラズ、
 人類ニ齒ノ生ズル、二回ナリ、始ニハ之ヲ乳
 齒トイヒ、終ニハ之ヲ永齒トイフ、乳齒ハ各顱
 ニ門齒四、牙二、齶四本アリ、計シテ二十本ナリ、
 永齒ハ各顱ニ門齒四、牙二、小齶四、大齶六本ア
 リ、計シテ三十二本ナリ、後ノ門齒ノ上顱ニ在
 ル者ハ前ノ門齒ヨリ大ニシ、其下顱ニアル者
 ハ之ヨリ小ナリ、上齶ノ齒頭ニ四箇ノ小丘ア
 リ、且齒頭ヲ斜行スル稜背アリ、内部ノ前丘ヨ

リ起リ外部ノ後丘ニ止ルヲ常トス(第三圖ヲ見ヨ)下顎ノ前齧ニ五丘アリ、其三丘ハ外部ニ屬シ二丘ハ内部ニ屬セリ、小齧ニ二丘アリ内外各一ナリ、中ニ就キ外部ニアル者ヲ以テサラニ高シトス、上ニ論ズルトコロヲ以テハ、ヨリテト人類ト毫モ異ナルトコロナシ、然レモ他ノ事件ニ至リテハ、往々差異ナキニシモアラザルナリ(第三圖)

人類ノ齒ハ齒間ニ空處ナク、而ノ一齒モ列外



ニ突出スル者ナシ、是レ人齒ノ規矩ノ正シク
シテ、齒種ノ齊フ所以ナリ、實ニ嘗テ久未ガ論
ゼシ如ク、哺乳類中タゞ一種ノ生物ヲ除キテ
ハ、他ニ此類例ナシ、所謂一種ノ生物トハ「ア」ノ
プロセルムハ是ナリ、其亡失セルヤ遠キ上古
ニアリ、但シ此生物ノ體形ハ大ニ人類ニ異ナ
ルヲ明カナリ、然リト雖モ、「リ」ノ齒ハ之ト
異ナリ、兩顎ノ齒間ニ空處アリ、即チ上顎ニ於
テハ牙ト末端門齒トノ間ニアリ、下顎ニ於テ
ハ牙ト前端小齒トノ間ニアリ、「リ」ノ牙ハ

固ヨリ大ニノ諸獸牙ノ如ク列齒ノ平面ヨリ
突出ス、故ニ此空處ハ相反スル頤ノ牙頭ヲ収
ムルニ適セリ、ゴリラノ小齶根マダ大ニ人類
ニ於ケルヨリ精工ナリ、諸齶ノ比大モ異ナル
トコロアリ、下頤最後ノ齶頭マダ精工ニ、永
齒ノ發生モ其順序ヲ異ニセリ、永牙ノ發生ハ
人類ニ於テハ第二第三齶ノ生出スル以前ニ
アリ、ゴリラニ於テハ其以後ニアリ、
是故ニゴリラハ齒ハ其數、其種類、其齒頭ハ形
狀ヲ以テ人類ニ彷彿タリヤ、其異ナリトス

ベキハ比較上ハ大小、齒根ノ數、發生ノ順序ハ
如キ、第二因ニアルハミ、
今マダゴリラノ齒ヲ以テ之ニ親接スルヲサ
イノセフ、ラズ即チ「マブロン」ヨリ遠カラザル
猿類ニ比較セハ、同種類中ニ通存スル異同ハ
直チニ之ヲ發見スベシ、然リ而シテ「ゴリラ」ガ人
類ニ對シ類似スルトコロニ「マブロン」ニ對
シ異ナルトコロアリ、マダ「ゴリラ」ガ人類ニ異
ナルトコロノモノ「サイ」ノセフ、ラズニ於テ更
ニ甚ダシキヲ見ルアリ、「マブロン」ノ齒數ト齒

質トハ、ゴリラ及ビ人類ニ於ケルト一様ナリ、
而レモ「ベブレン」ノ上齧ハ其形狀ヤ、前記ノ
体裁ニ異ナリ、牙ハ比較上サラニ長ク、且サラ
ニ小刀狀ヲナセリ、下頤ノ第一小齧コトニ變
ジ、其後齧ハ「ゴリラ」ヨリサラニ大ニシ且精工
ナリ、

諸舊世界猿類ヨリ新世界猿類ニ轉ズレバ、ナ
ホ一層重大ナル差異アリ、「ジーバ」第三圖ヲ
見ヨハ牙ノ凸出及ビ齒間ノ空處ノ如キ第二
因ヲ以テ判然大猿ニ類似セリ、而シテ他ノ重要

ナル事件ニ係リテハ、齒牙ノ情狀非常ニ異ナ
ルトコロアリ、乳齒二十本ニアラズノ二十四
本ナリ、永齒三十二本ニアラズシテ三十六本
ナリ、小齧ハ八本ヨリ十二本ニ至ル、且其齧頭
ノ「ゴリラ」ニ異ナルハ甚ダシク、マタソノ人類
ニ異ナルハサラニ甚ダシトス、
「マルモセツ」ノ齒數ハ却テ人類及ビ「ゴリラ」ト
一様ナリ、然レモ「マタ」ニ異ナルトコロアリ、
他ノ「亞米利加猿」ト同シク、小齧ノ數四本多ク
シテ、大齧ノ數四本少ナシ、サラニ「亞米利加猿」

ヨリ「マ」ニ轉ズレバ、齒牙ノ情狀ノ「ゴ」リヲ
 ニ異ナルハ一層甚ダシトス、門齒ハ數形トモ
 ニ異ナリ、齒頭ハ數銳丘ヲナシ食虫動物ノ情
 アリ、其一種「イ」イ「シ」ロ「ミ」スノ如キニ於
 テハ其牙消滅シ、諸齒一ニ咽獸類ニ符合セリ
 (第三圖ヲ見ヨ)
 是ニ由テ之ヲ觀レバ、最高猿類ハ齒ハ人類ハ
 齒ニ異ナルハ、最低猿類ノ最高猿類ニ於ケル
 ガ如キ、雲泥懸隔スル者ニ非ルヤ明カナリ、
 更ニ之ヲ比較スルニ身體造構ノ何部ヲ以テ

シ、肌筋ノ何部ヲ以テシ、臟腸ノ何部ヲ以テス
 ト雖モ、其成果ハ齊シク皆一ニ歸セリ、即チ下
 等猿類ハ「ゴ」リ「シ」ニ異ナルハ「ゴ」リ「シ」ハ人類ニ
 異ナルヨリモ更ニ大ナリ、固ヨリ筆紙ニ限リ
 アリ、コ、ニ之ヲ盡ク比較精覈スル能ハズ、且
 其無用ニ屬スルヲ信ゼリ、然レドナホ世人ガ
 往々人猿ノ相異ナル特殊ノ造構ナリトスル
 者アリ、洵トニ藐忽ニ屬スベカラザル者ナリ
 故ニ姑ラク之ニ論及シ、以テ其取ルベキハ之
 ヲ取り、舍ツベキハ之ヲ舍テ宜シク其可否ヲ

X

決セント欲セリ、所謂特殊ノ造構トハ手、足、腦、漿是ナリ、請フ次ヲ逐テ左ニ之ヲ論說セン、人猿ノ手、足ヲ比較研究セント欲セバ宜シクマヅ人、類ノ手、足ノ造構ヲ詳カニシ、以テ手ト足トノ何物タルヲ明晰セザル可ラス、手首ノ外形ハ人ノヨク知ル所ナリト雖モ、今其大略ヲイハバ、マヅ腕アリ、次ニ掌アリ、末端ハ四箇ニ分レ、屈伸自由ナル指トナリ、指節ノ末ニ手甲アリ、指長ハ最長ナルモノニテ手首ノ半長ニスギザルナリ、他ニ一指アリ、掌ノ外

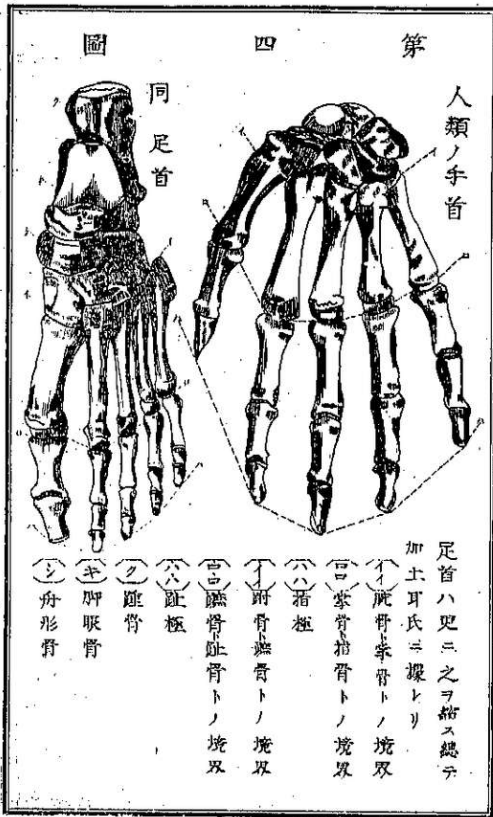
側ヨリ起リタマニ二節ヲ以テナリ、其指頭ハ次指ノ初節ノ中央ヨリ少シク先ニ達ス、而シテ其運轉ノ自在ナルヲ以テ他ノ諸指ニ對シ、殆ンド直角ヲナシ外ニ開クヲ得、是レ即チ大指ナリ、大指ハ運轉ノ自在ナルト指長ノ適宜ナルトヲ以テ之ヲ可反指トイヘリ、何ニトナレハ大指ノ指頭ハ意ニ任セテ他ノ指頭ニ反接スルヲ得レバナリ、抑人類ガ思想ニ有ツ者ヲ以テ外身ニ施コシ、實果ヲ収ムルヲ得ル所以モマタコトニ屬セリ、

足首ノ外形ハ手首ノ外形ニ異ナルト雖モ、ヨク之ヲ照考スレバ大ニ符合スルトコロアリ、跗ハ腕ニ蹠ハ掌ニ趾ハ指ニ大趾ハ大指ニ符合セリ然レニ趾長ハ大ニ指長ニ異ナリ大趾ノ運轉ハ遙カニ大指ニ劣レリ而メ大趾ノ諸趾ヨリ甚ダ大ナルハ大指ノ諸指ニ於ケルト其趣ヲ異ニセリ然リト雖モ、コ、ニ一言セザルベカラザルモノアリ、抑開明ノ人民ハ、生出ヨリ死没ニ至ルマデ、日トシテ足趾ヲ禁束セザルナシ、宜ナル乎其運轉力ヲ失セルヤ、然ル

ニ野蠻ノ人民ハ却テ之ヲ跳放セリ、是レ其運轉力ヲ保有シ、或ハ屢可反的ノ性アルヲ致セシ所以ナリ、然リ而シテ、趾節ノ造構、蹠骨ノ裝置等ヤ、大指ニ異ナルトコロアリ、因テ其拿住力ノ不完全ヲ來セリト雖モ、支那ノ水夫ハ之ヲ以テ揮ヲ引キ、便加爾ノ織工ハ之ヲ以テ布ヲ織リ、加拉惹斯人ハ之ヲ以テ鈎針ヲ竊取スルヲ得タリトイフ、

夫レ手、足首ノ異同ヲ辨明シ特質ヲ究察スルハ、マヅ其皮下ヲ研究シテ骨骼ノ造構及ビ運

轉ノ機法ヲ比考スルニアリ(第四圖)
 孰、手首ト足首トノ造構ヲ比較スルニ、指骨ハ
 三節ニテ大指骨ハ二節ナリ、大小指モマタ然
 リ、蹠骨ノ數ハ掌骨ノ數ニ符合シ、跗骨ノ一列
 ラナス四箇ノ多角骨ハ、腕骨ノ第二列ニアル
 四箇ノ多角骨ト符合セリ、此等ハ三十手、足兩
 首ノ相同シキトコロナリ、次ニ其異ナルモノ
 ヲ視ルニ、大趾ハ其長ヲ以テ第二ニ居リ、其蹠
 骨ノ跗骨ニ連接スルハ少シク固着セル趣キ
 アリ、運轉ノ自在ナラザルハ大指ノ掌骨ノ腕



ニ於ケルト相異ナリ、而ノサヲニ別アル者ハ
跗骨ナリ、其數ナホ四箇アルベキヲ漸ヤク三
箇ニシテ加フルニ此等ノ三箇ハ一列ヲナサズ
レバ位置甚ダ不規則ナリ、即チ其一ハ外側ニ
アリ一部分ハ後ロニ突出ス、是レ即チ踵骨ナ
リ、他ノ一骨ハ脚眼骨ナリ、其一方ハ踵骨ニ安
居シ、一方ハ脚眼骨ニ接シ脚眼ヲ成シ、ナホ一方
ハ前ニ向ヘリ、ナホ他ノ一骨ハ舟形骨ト名ク
ル者ニテ一方ハ脚眼骨ノ前面ニ連リ、一方ハ
四箇ノ一列骨ノ内側三箇ニ接セリ、之ヲ要ス

ルニ手足両首ノ造構ニ於ケル差異ハ腕跗ノ骨數ト掌骨蹠骨ノ指趾ニ於ケル比長及ビ運轉ノ度トヲ異ニスルニアリ、手足ノ筋ニ係リマタ之ニ等シキ差異アリ、手ニ屈指筋ノ重ナル者三種伸指筋ノ重ナル者三種アリ、專ラ大小指ヲ屈伸スルヲ司ドル足ニマタ同種ノ筋アリ、然レデ伸指筋及ビ屈指筋ノ各一筋ハ短カキ者ナリ、即チ其手ニ於ケルハ臂ニアリ、而ルニ此等ハ臂ニ符合スル脛ニアラズメ、掌ニ符合スル蹠ニアリ、殊ニ其

表裏ニ存セリ、加フルニ長キ屈趾筋ハ蹠ニ達スルノ後、ナホ掌ノ屈指筋ノゴトク各獨立スベキヲ然ズシテミナ合一セリ、殊ニ其情狀甚ダ奇ナリ、且踵骨ト連續スル一種ノ屬筋アリ、來テ之ニ合併セリ、足ニ「ロニース、ロンガス」トイフ一種ノ筋アリ、是レ手ニナキ者ニテ、足筋ノ全ク手筋ニ異ナルモノハ此一筋ニアリ、此筋ハ脛ノ外側ノ骨邊ニ起リ、延テ脚眼ノ後ロヲ過テ其下ニ出テ、斜ニ蹠ヲ踰エ大趾ノ基ニ達セリ、手ニ此筋

ニ類似スル者アラザレバ、是レ純然タル足筋ナリ、

筋骨ノ結構ヲ以テ人類ノ足首ノ手首ニ異ナル所以ヲ約言スレバ左ノ數件ニ止レリ、

第一 跗骨裝置ノ事

第二 短ナル屈趾筋ト短ナル伸趾筋トノ

存スル事

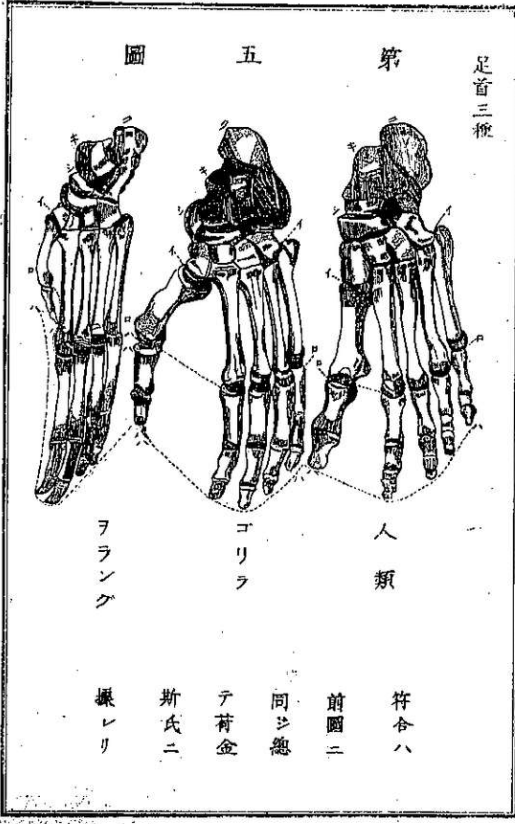
第三 べロミースロンガス筋ノ存スル事

夫レ高等哺乳類ノ肢端ヲ以テ或ハ手首トイフベキヤ、或ハ足首トイフベキヤ如何ヲ決ス

ルハ、主トシテ此等ノ箇條ノ有無ニ屬セリ、彼ノ大趾ノ長短及ビ其運轉ノ快否ノ如キハ、ニ與カラザルベシ、何ニトナレバ此等ハ敢テ足ノ造構ニ差異ナクシテ其變化極リナキヲ以テナリ、

諸是ヨリ前顯ノ事情トゴリラノ四肢ノ事情トヲ比較スベシ、ゴリラノ前肢ノ極端ハ筋骨及ビ些小ノ變化ニ至ルマデ一ニ人類ニ同シ、タゞゴリラノ手首ハ拙劣ニノ粗重ナリ、大指ハヤ、人類ヨリ短シ、然レモ之ヲ以テ真ノ手

首ナリトセザルモノナシ、
 忽チ之ヲ觀レバ「ゴリラ」ノ後肢ハ最モ前肢ニ
 似タリ、然ノサラニ下等ノ猿類ニ至リテハ特
 ニ然ルヲ知レリ、夫ノ解剖學ノ古家「拉孟拔」
 ガ創稱セルトコロニ、久未モ「タ不幸ニ之
 ヲ流用シタル四手類ナル名稱」ミアン屬ノ
 猿名トナリ廣ク天下ニ行ハル、ヲ得タルハ、
 「タ故ナキニアラザルナリ、然レモ少シク其
 造構ヲ研究セバ後肢ハ前肢ニ符合スルハ、
 「ハニ皮膚ニ止リ、重要ハ條件ヲ以テ之ヲ察ス



レハ、乳リ、ハ後肢ハ端部ハ全ク人類ハ足首
ニ符合セリ、跗骨ノ如キハ數トイヒ裝置トイ
ヒ形トイフ也、一モ人類ノ跗骨ニ符合セザル
ナシ、然レ、ヒ蹠骨及ビ趾骨ハ比較シテ、サラニ
長クサラニ細軟ナリ、大趾ハタゞニ短弱ナル
ノミナラズ、ナホ其蹠骨ノ跗骨ニ連接セル骨
節ハ大ニ回轉ニ便ナリ、而シテ足首ノ脛ニ接續
スルハ人類ニ於ケルヨリモサラニ傾斜ナリ

(第五圖)

マタ其屈趾筋及ビ伸趾筋ニ各一ノ短筋アリ

ゴロニリスロンガ筋アリ、加フルニ長キ屈
趾筋マタミナ合一シテ一種ノ屬筋ト合併ス
ルアリ、
故ニゴリラノ後肢ノ極端ハ足首ニテ運轉自
在ナル大趾ヲ存スル者ナリ、拿住力アリト雖
モ決シテ手首ニアラズ、然ノ其人類ノ足首ニ
異ナルトコロハ、造構ノ根本ニアラズシテ、其
長短運轉ノ快否、小部令ノ裝置ニアリ、是ヲ以
テ人類ノ足首トゴリラノ足首ト重件ヲ以テ
大同ナルハ、此等ノ小異ト同日ノ論ニアラザ

ルナリ、
之ヲ要スルニ人類ハ手足ハゴリラハ手足ニ
異ナルハ、ゴリラハ手足ハホ下等猿類ハ手
足ニ異ナルヨリモサテニ小ナリトイフベシ、
此事ハ猿類中「テラング」以下ニ下ダラズシテ
之ヲ證明スルヲ得ベシ、ソレ「テラング」ノ大指
ノ「ゴリラ」ノ大指ニ異ナルハ、ゴリラノ大指ノ
人類ノ大指ニ異ナルヨリモサテニ大ナリ、其
差異タルヤ獨リ其短小ナルニアルノミナラ
ズ、ナホ一モ長キ屈指筋アルナシ、然ノ「テラン

ノ手ハ下等猿類一般ニ於ケルガ如ク掌骨
九箇ナリ、然レデゴリラノ掌骨ハナホ人類及
ビシシパンシト一様ニ其數八箇ナリ、
ヲランゴノ足首ハ更ニ奇ナリ、小趾甚ダ長ク
シテ、跗骨及ビ大趾ミナ短ク踵骨モ短クシテ
突出シ、且脛ニ連續スル甚ダ傾斜ナリ、其大趾
ニ至ル長キ屈趾筋ノコレナキハゴリラニ異
ナルト、ゴリラガ人類ニ異ナルヨリモホ大
ナク、
更ニ下等ノ猿類ニ至リテハ手足兩首ノゴリ

ラニ異ナルト、ヲランゴノゴリラニ於ケルヨ
リモマタ適カニ甚ダシ、亞米利加猿ノ大指ハ
可及的ノ性ナシ、蜘蛛猿ノ大指ハ皮下ニアル
一ノ不具物ニメ、マルモセトノ大指ハ他ノ諸
指ノ如ク前ニ向ヒ、加フルニ其甲彎曲ナリ、即
チ此等ノ例ニ由テ考フルニ下等猿類ハ手ハ
爪ハラニ異ナルハ、爪ハラハ手ハ人類ニ異ナ
ルヨリモホカヲニ甚ダシ、
マルモセトノ大趾ハヲランゴヨリモ比較シ
テ甚ダ小ナリ、然レデゴリマトノ大趾ハ甚ダ大

類論 卷一 三十五

ニノ、而ノ大指状ヲ具ヘ、可反的ノ性ヲ存スル
 等ヨクゴリラニ符合セリ、然リト雖モ、此等
 ノ諸動物ノ第二趾ハ屢不規則ニ變ジ、或ハ跗
 骨ノ二大骨即チ脚眼骨及ビ舟形骨非常ニ大
 ニシ、足形全ク他ノ哺乳類ニ異ナルアリ、
 筋モマタ然リ、ゴリラノ諸趾ノ短ナル屈趾筋
 ハ其一小屬筋ノ踵骨ニ附着セズシテ、長キ屈
 趾筋ニ附着スルヲ以テ人類ニ異ナルトコロ
 アリ、而シテ之ニ均シク、下等猿類ニ短ナル屈趾
 筋ノ屬筋數條長キ屈趾筋ニ附着シ、以テゴリ

ラニ異ナルアリ、ゴリラマク長キ屈趾筋ノ組
 置ノ方法ニ於テ少シク人類ニ異ナリト雖モ、
 下等猿類ハ之ヲ以テゴリラニ異ナルカラニ
 甚ダシ、或ハソノ布置大ニ錯雜ナルアリ、或ハ
 附屬ノ肉筋コレナキモアリ、
 此ノ如ク種々ナル變化アリト雖モ、足ノ足タ
 ル所以ノ特質ハ、未ダ曾テ一モ之ヲ失セザル
 ナリ、下等猿類及ビゴリラニ跗骨ノ特別ナル
 布置アリ、短ナル屈趾筋アリ、短ナル伸趾筋ア
 リ、ペロニース、ロンガス筋アリ、且其比例及ビ

體裁ハ悉ク一ニ出デズト雖モ、造構ノ意匠及
ビ、使用ノ道理ニ於テハ純然タル足ニテ、決シ
テ手ト混同スベカラザルモハアルナリ、
人類ト高等猿類トニ於ケル身體造構ノ差異
ハ、最高猿類ト最低猿類トニ於ケル其差異ヨ
リモ實ニ僅小ナリ、其所以ヲ證明スルハ、身體
諸部ノ中手足ノヨキニ若クモノナシ、然レド
ナホコ、ニ一ノ緊要ナル機關即チ腦漿ナル
者アリ之ヲ檢察セバサラニ此說ヲ確證スベ
シ、

蓋シ猿類ノ腦漿ニ進度ノ次序アリ、少シク啞
獸類ニ優レル者ヨリ、聊カ人類ニ劣レル者ニ
至ル上下ノ連續スル、ナホ級子ノ階梯ニ於
ケルカゴトシ、是レマタ腦漿ヲ以テ人猿ヲ區
別スベカラザル明證ナリ、然リ而ノ方今學識
ノ及ブトコロニヨレバ、腦漿ノ異ナリトスベ
キハ、人類ト似人猿類トノ間ニアラズシテ、シ
ミアン屬ノ下等猿類ト其最下等猿類トノ間
即チ舊新世界兩部ノ下等猿類ト其最下等ニ
屬スル「マ」トノ間ニアリ、且從來研究セル

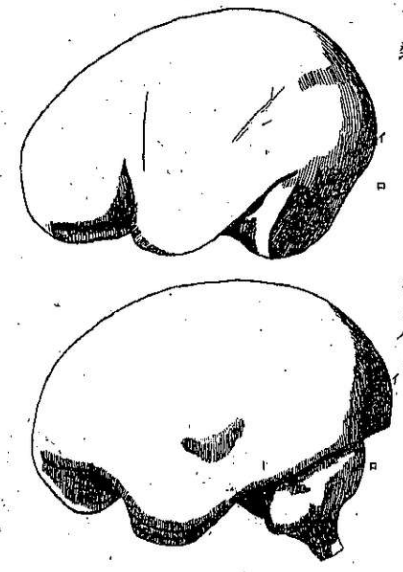
〇マールハミナ大脳ノ後邊暢發不完全ナルヲ
 以テ其小腦ヤ、上ヨリ見ヘ、加フルニ其後角
 及ビ小海馬モ多少不具ナリ、然ルニ「マルモセ」
 〇「亜米利加猿」舊世界猿「ブーン」似入猿等ニ
 於テハ大脳ノ後邊却テヨク暢發シ、小腦為ニ
 蓋ハレ、而ノ後角及ビ小海馬モミナヨク暢發
 セリ、
 此等ノ猿類中、例ヘバ「クリソル」クノ如ク、往々
 大脳ノ後邊ヨク暢發シテ小腦ヲ蔭蓋シ、其情
 却テ人類ニ優出スル者アリ、其他總テ大脳ノ

後邊暢發シテ小腦ヲ蓋フハ、此等ノ猿類ニ於
 ケル通情ニテ、此實事ハ舊世界若クハ新世界
 部猿類ノ鬪體ヲ所有セル者ノ、マサニ實察ス
 ルヲ得ベキトコロナリ、何ニトナレハ哺乳類
 ノ腦漿ハ盡ク腦窩ニ充滿セリ、故ニ其内部ノ
 雛形ヲ摸出セバ、タトヒ白體ニ腦漿ノ覆膜ナ
 クシテ或ハ微小ナル差異ヲ生ゼザルニアラ
 ザルベケレド、ホゞ腦漿ノ形象ヲ得ベシ、モシ
 之ヲ摸出スルニ灰坭ヲ以テシ、然ノ之ヲ均シ
 キ人腦ノ雛形ト比較シタランニハ、彼ノ猿類

ハ大脳ハ全ク小脳ヲ蓋フト人類ニ異ナラサ
 ルヲ證認スベシ(第六圖)
 然リト雖モ論者或ハ腦漿ノ如キ柔軟物ノ腦
 窩ヲ脱スル際其真形ヲ失スル所以ヲ顧ミズ
 脱窩腦漿ノ垂亂シテ大脳ノ後邊ノ小脳ヲ蓋
 ハザルニ至リシ者ヲ以テ一ニ之ヲ其真形ナ
 リトスルハマタ過テリトイフベシ其故ハサ
 ラニ此腦漿ヲ以テ之ヲ腦窩ニ置キナバ、忽チ
 其説ノ非ナルヲ自得スベケレバナリ、抑猿腦
 ノ後邊ハ暢發不完全ニ未ダ小脳ヲ蓋フニ

第六圖

腦發二種
人類



シムパンジー

④ 大脳
 ③ 小脳
 馬
 馬爾沙耳
 氏ニ根ル

至ラザル者ナリト想像セルハ、其誤ナホ胸膈
ヲ發ケバ人肺其一小部分ニアルヲ見、而シテ其
彈カ已ニ大氣ハ壓力ニ抵抗スル能ハザルデ
ルハ故ヲ以テ然ルヲ顧ミズ、以テク人肺ハ胸
膈ノ一小部分ヲ充ス者ナリトスルガ如シ、
此ノ如キ誤謬ハ誠ニ冷笑ニ堪ヘザルナリ、苟
モ「レ」以上ノ猿類ノ鬮體ヲ截分セル者ヲ
觀ベ、敢テ其雛形ヲ摸出セズシテ其理ヲ解ス
ルヲ得ベシ、蓋シ此等ノ猿類ノ鬮體ニ悉ク一
凹澤アリ、ナホ人類ニ於ケルガゴトシ、此凹

澤ハ大脳ト小脳トヲ分界シ大脳ヲメ恣ニ
小脳ヲ壓搾ヒシメザル脳境膜ノ所在ヲ示ス
モノナリ(第二圖ヲ參見セヨ)
故ニ此境界ハ即チ腦窩ノ中ニ於テ大脳室ト
小脳室トヲ分界スル者ナリ、而シテ腦漿ハ固ヨ
リ腦窩ニ充滿スレバ、此二室ノ比例ハ即チ其
所有物ナル腦漿ノ比例ヲ測ルニ足レリ、今人
類及ビ舊新世界兩部「シミアン」屬ノ猿類ヲ觀
ルニ、其面ヲ正面ニ向レバ、タゞ一種ヲ除クノ
外ハ、ミナ此境界線水平ノ位置ニアリ、而シテ大

腦ハ盡ク小脳ノ外ニ出デヨク之ヲ蓋ヘリ
「マイストス」(第二圖ヲ見ヨ)ノ脳境膜ハ其水平
面後ロニ向ヒ上ニ進ム斜線ヲナセリ、故ニ其
大脳サラニ小脳ヲ蓋ハズ、マタ「マ」ノ脳境
膜ハ、サラニ下等哺乳類ニ於ケルガ如ク、ナホ
急遽ノ斜線ヲ成シ、小脳ハ遠ク大脳ノ外ニ突
出セリ、

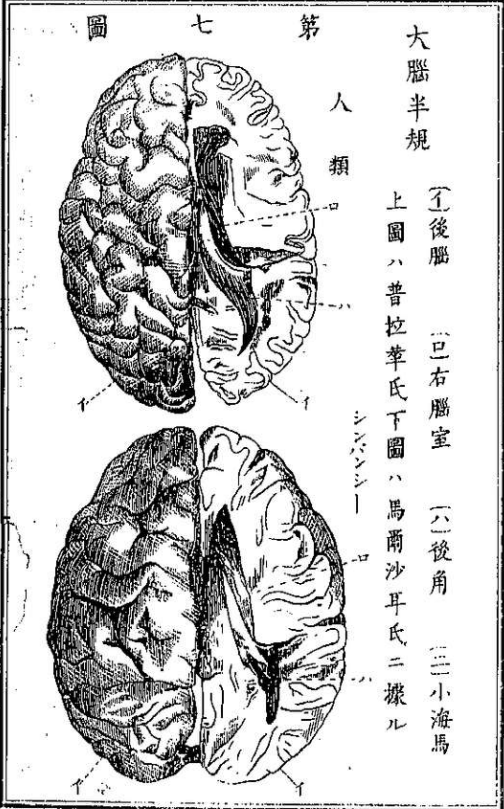
夫レ此ノ如キ一目瞭然タル事ダモ、誤解ノ甚
ダシキナホ且然リ、況ンヤ許多ノ思考ヲ要ス
ル者ニ於テホヤ、人トシテ未ダ猿類ノ腦漿ヲ

一目セザル者ハ、マダ馬シバ其腦裡ノ後角及
ビ小海馬ヲ議スルヲ得ンヤ、是レ寺觀ニ詣ラ
ズシテ其神壇及ビ窓牖ノ美ヲ論ルノ嗚呼ナ
ルニ異ナラザルナリ、是ヲ以テ余ハ深ク之ニ
論及ズルヲ要セス、然レモ彼ノ後角及ビ小海
馬ノ暢發シテ人類ニ等一ナルアリ、或ハ却テ
之ニ優出スル者アルが如キハ、讀者ノ已ニ察
了スルトコロナリ、然リ而ノ是レタシシンパ
ンジ「ララング」ギボン等ニ於ケルノ通情ナ
ルノミナラズ、ナホ舊世界部ノ「バブーン」及ビ

其下等猿類并ニ新世界部ノ「マルモセツ」其他
ノ諸種ニ於テモマダミナ然ルナリ、
其他此等ノ議論ニ就テ有名ナル諸解剖家ノ
辛究苦察セル確證ハ勝テ算フベカラズ、蓋シ
大腦ノ後邊、後角及ビ小海馬ノ如キハ人類固
有ノ造構ニアラザル「明瞭」ナリ、然ルヲ敢テ
之ヲ其固有ノ造構ナリト要論スル者アリト
雖モ、ナホツレ此等ノ造構ハ腦漿ニ於テ人猿
普通ハ最モ著シキ者ナルハ太ダ明カナリ、然
レノ人體造構ノ「シミアン」屬猿類ニ在テ最モ著

八
二五九

明ナル者モマタ此造構ナリトス、
 猿ノ迂曲ニマタ種々ノ度アリ、マルモセト
 ノ腦ノ平滑ナルヨリ「ラング」及「シンパン
 ジ」ノ腦ノ人腦ニ髣髴タル者ニ至ルノ間、其
 進度秩然トノ次序アリ、之ニ加ラルニ溝澤ハ
 布置方、向一タビ現出スルヨリ、已ニ人腦ハ溝
 澤ニ符合セルハ實ニ驚クニ堪ヘタリ、下等猿
 腦ノ表面ハ人腦ヲ略圖セルモノ、如シ、猿類
 愈上等ニ至リ、腦漿愈精進ヲ極メリ、既ニ「ジ
 パンジ」ヲ「ラング」ニ至リテハ、腦漿造構ノ人



類ニ異ナルハ前腦ハ空虚通常人類ニコレナ
キ罅隙ハ現出及ビ迂曲ノ中或ハ其方向ヲ異
ニシ比例ヲ同クセザル者アルガ如キ至小ノ
點ニ止ルナリ、

是故ニ腦漿造構ヲ以テ人類ノジンパンジ
若クハ「ヲラング」ニ異ナルハ「ジンパンジ」及
ビ「ヲラング」ノ下等猿類ニ於ケルヨリモ更ニ
小ナル者ニメ、而シテ「ジンパンジ」ト人類トノ
腦漿ノ差異ヲ以テ、之ヲ「ジンパンジ」ト「マ
」トノ腦漿ノ差異ニ比スレバ、人類ト「ジンパ

ニト生イシベシ者一毛大輪ニ入ル者一鏽齒輪
ハセザル時辰如キ論至小ノ者ナレバ動止大異ノ原
由未トガナル既ルニモヲセヨルナトク其ノ類ハニク
ラヲ發ルスニルモヲセヨルナトク其ノ類ハニク
ゾラ人ノ類ニ至小ノ原由均然ラシムタル造立ニ大
於テ差ト至小ノ原由均然ラシムタル造立ニ大
然リト雖モ既ニ腦窩ノ度量ニ就テ反覆究論
スル如ク最高人腦ト最低人腦トノ差異ハ最
低人腦ト最高猿腦トノ差異ヨリサレニ大ガ
ル一事ヲ參攷スレバ此ノ如キ事情モマダ敢

出テ現ル者ハ掌スルリカ然リニ腦中ト雖モ一
言大ヘヲ顯者ハ掌スルリカ然リニ腦中ト雖モ一
社トハヲ難ラシニ生ラコシ長有ニシニハ
造トハヲ難ラシニ生ラコシ長有ニシニハ
用ルニ成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
抑致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
シ抑致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
刻シ抑致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
鏢シ抑致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ
ル鏢シ抑致ニ知成マラシニ生ラコシ長有ニシニハ

テ採ルベキ所ナキ者ニ似タリ、即チ最低人類
 ト最高猿類トハ腦重ノ比例三十二「オン」スノ
 二十「オン」スニ於ケルモノニテ、ソノ真差十二
 「オン」スナリ、然ルニ嘗テ檢測セル最大ナル人
 腦ハ六十五「オン」ス若クハ六十六「オン」スノ重
 量アリ、故ニ最高ナル人類ト最低ナル人類ト
 ハ、腦重ノ比例六十五「オン」スノ三十二「オン」ス
 ニ於ケルモノニテ、ソノ真差三十三「オン」スナ
 リ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、人猿腦漿ハ差ハ人猿
 種分ヲ異ニスルヲ證スルニスギズシテ、決メ



本來ノ異ナルモノニアラザルヲ徴スルニ足
 ハリ齒牙尻骨盤下肢ノ差異ニ至リテハタゞ
 人猿ノ屬別ヲ證スルニ不キザルハミ
 更ニ體格造構ノ何部ヲ比較スル尺其變化ノ
 猿類中ニ於ケル者ハ齊シクミナ其情ヲ一ニ
 セリ即チ人類ハズリテ及ビシハソノ小ニ
 於ケル差異ハズリテハ下等猿類ニ於ケル者
 ヲリサテニ微小ナルト明白ナリ(第八圖)

人胚ノ暢發ヲ論ス

人卵ハ直徑殆ンド一英寸ノ百二十五分一ナル

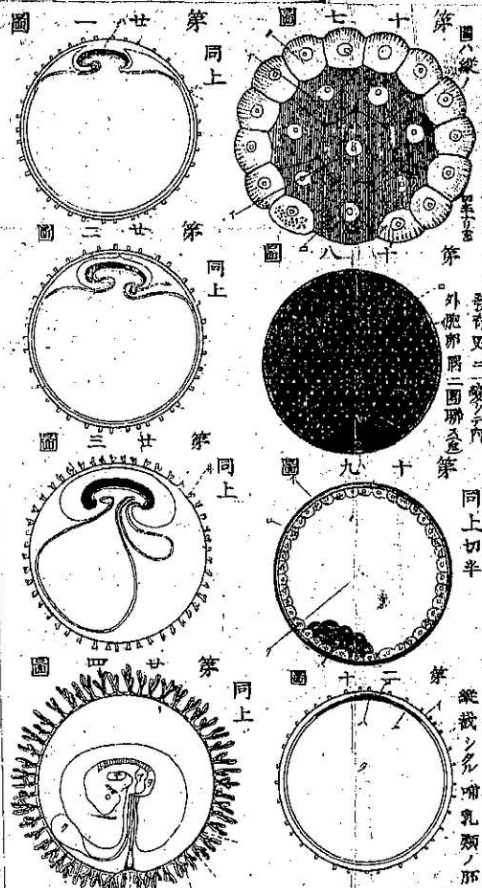
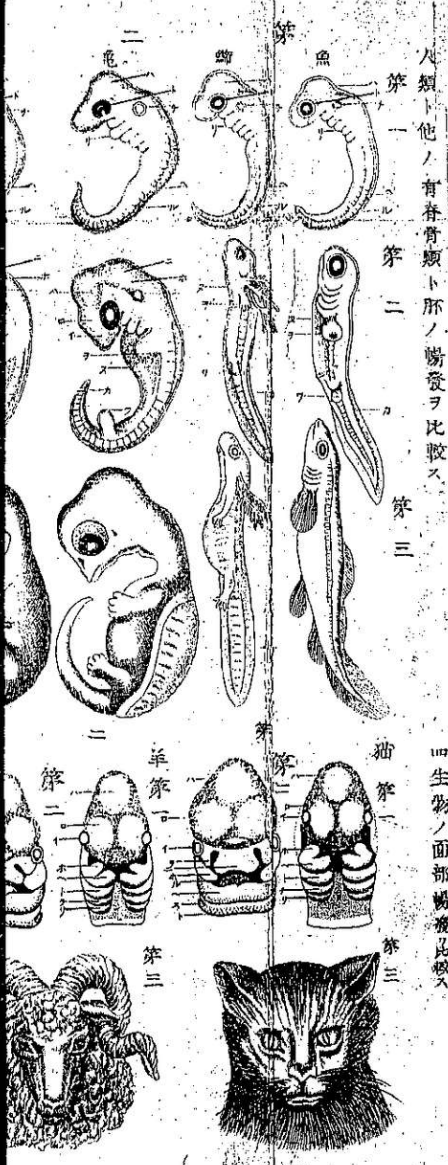
人胚ノ暢發ヲ論ス
 四三ノ

◎十八百六十
三年印行人類
天籟考第六十
七葉

小卵ニノ諸動物ノ生卵ト異ナル所ナシ。胚ト雖
モ極メテ最初ニ在テハ、ナホ有脊骨諸動物ト一
様ナリ。當時動脈ハ弓狀ナル枝管ヲ流動セリ。其
情恰カモ血液ノ總ヲ循環スルガ如シ。蓋シ鰓ハ
方今高等有脊骨動物ニコレナシト雖モ、胚ノ時
代頸側ニ條線①第九圖ヲ見ヨアリ、其痕跡明カナリ。
胚ノ漸ヤク成長シテ四肢ヲ生ズルニ及ンデモ、
碩學米亞君ノ言ノ如ク、蜥蜴及ビ哺乳類ノ脚足
鳥類ノ羽翼、人類ノ四肢發生ノ始、皆盡ク其情
狀ヲ一ニセリ。博士哈屈禮②曰ク、人類ノ嬰兒ハ

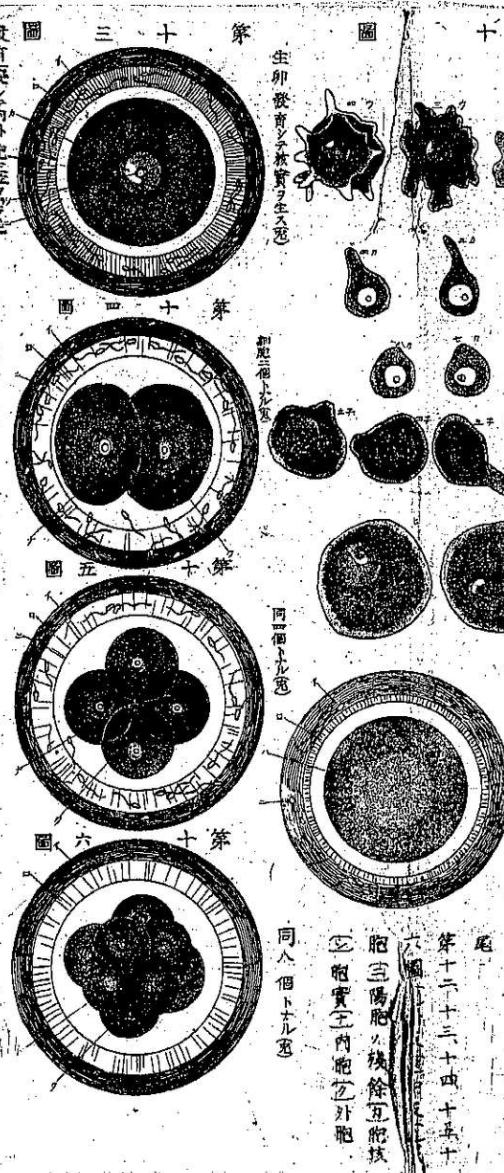
第十一圖 胎心六種
第九圖上圖ハ蓋加添

胎心六種
第九圖上圖ハ蓋加添



第十七圖至内胞之外胞
中心内胞守口内胞
第十八至十九圖至胎兒外
膜(外胞)内胞(内胞)之
空處
第二十圖至胎兒外膜(後
皮)内胞(前皮)之空處

第廿一圖(羊肝)
第廿二圖(羊尿膜)
第廿三圖(羊胎膜)
第廿四圖(羊手)之空處
即手房(羊尾)



第九圖上圖ハ蓋加氏下
圖ハ彼者弗氏ニ據ル
前腦(中腦)後腦(目
至耳)第一條線(第二
條線)脊椎及ヒ筋(手
足)尾

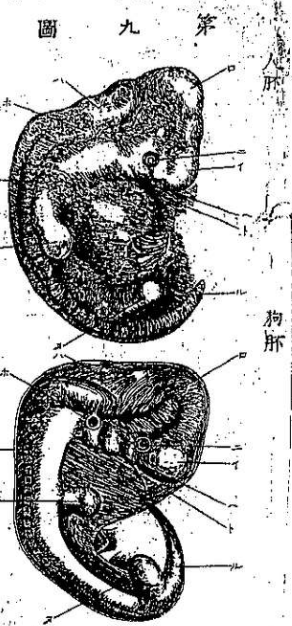
第十圖以下施テ各爾
氏ニ據ル(海綿)一種
血脈ノ動狀ヲ示ス(寄
生蟹八様ノ至猫五様ノ
環)三(鱗)人

第十一圖至(羊)狗(羊)尾
之(羊)根(羊)正(羊)面
側面(羊)心(羊)體(羊)耶
尾

第十二圖
至(羊)尾(羊)尾(羊)尾
至(羊)尾(羊)尾(羊)尾

第十二圖至(羊)尾(羊)尾(羊)尾
至(羊)尾(羊)尾(羊)尾

第十二圖至(羊)尾(羊)尾(羊)尾
至(羊)尾(羊)尾(羊)尾

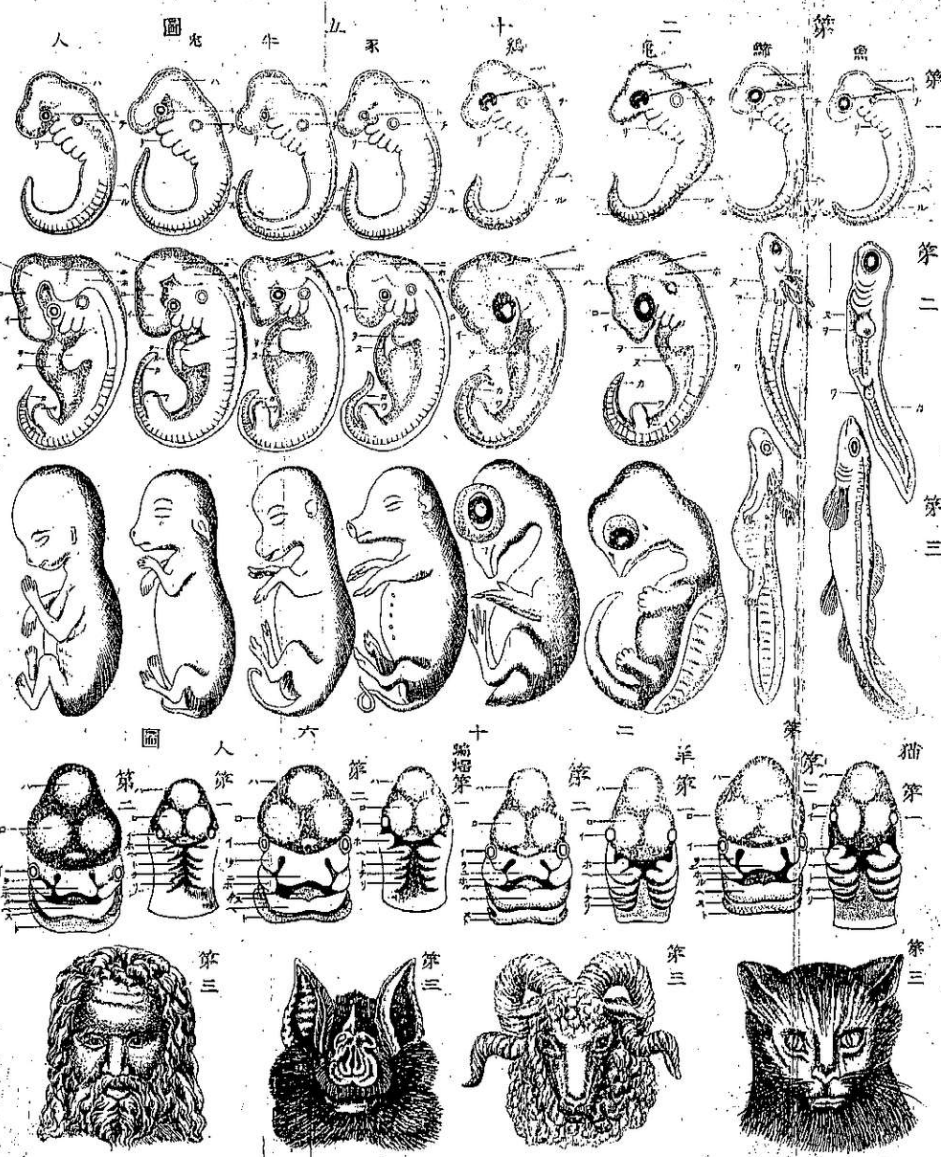


第十一圖 腸胞六種

① 卵 ② 卵 ③ 卵 ④ 卵 ⑤ 卵 ⑥ 卵 ⑦ 卵 ⑧ 卵 ⑨ 卵 ⑩ 卵 ⑪ 卵 ⑫ 卵 ⑬ 卵 ⑭ 卵 ⑮ 卵 ⑯ 卵 ⑰ 卵 ⑱ 卵 ⑲ 卵 ⑳ 卵 ㉑ 卵 ㉒ 卵 ㉓ 卵 ㉔ 卵 ㉕ 卵 ㉖ 卵 ㉗ 卵 ㉘ 卵 ㉙ 卵 ㉚ 卵 ㉛ 卵 ㉜ 卵 ㉝ 卵 ㉞ 卵 ㉟ 卵 ㊱ 卵 ㊲ 卵 ㊳ 卵 ㊴ 卵 ㊵ 卵 ㊶ 卵 ㊷ 卵 ㊸ 卵 ㊹ 卵 ㊺ 卵 ㊻ 卵 ㊼ 卵 ㊽ 卵 ㊾ 卵 ㊿ 卵

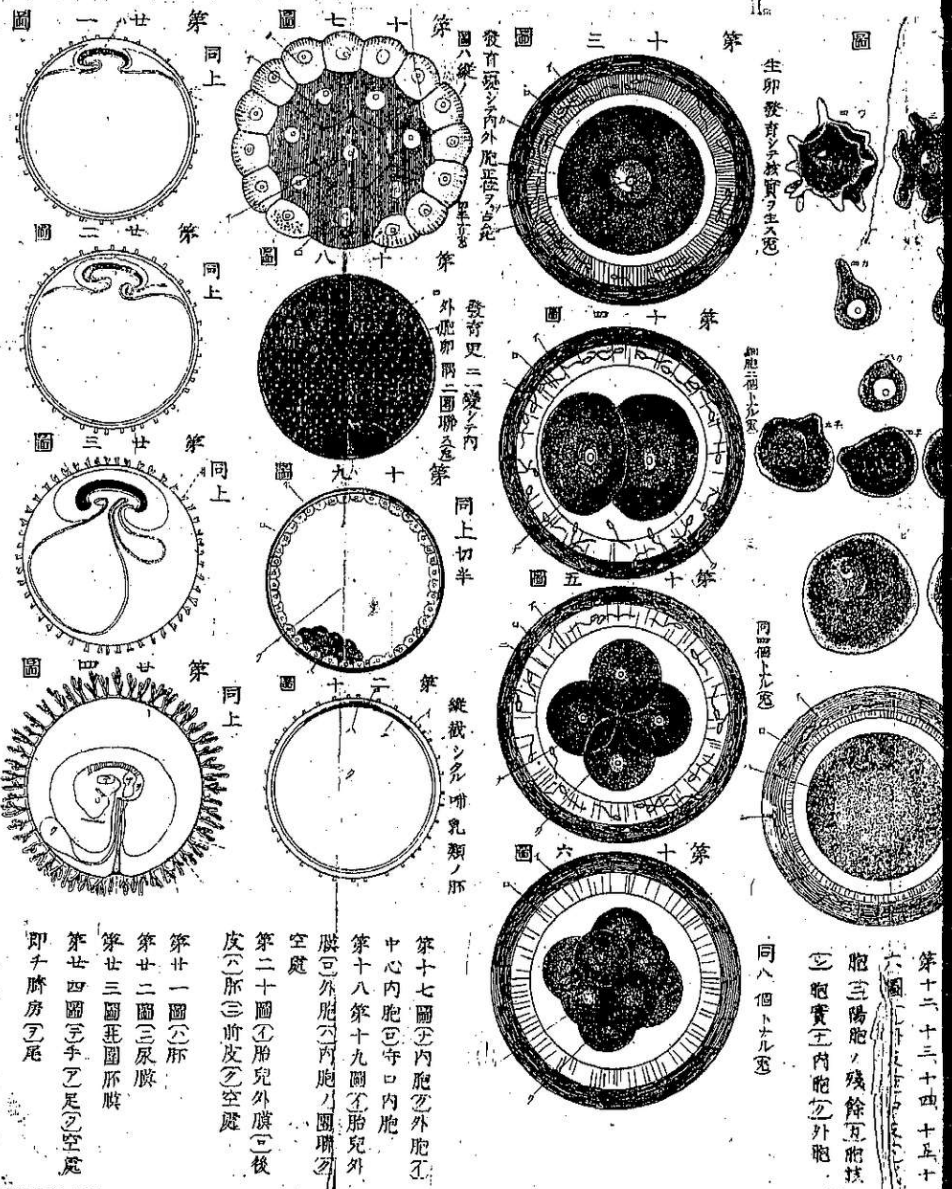
第二十五圖 (工)前腦(二)中腦(三)後腦(五)第二後腦(六)背髓(七)目(八)耳(九)心(十)肺(十一)脊椎(十二)手(十三)足(十四)尾

第二十六圖 (工)目(二)前腦(三)中腦(四)後腦(五)頸(六)上頸(七)第一頸門(八)副脊(九)下頸(十)第一頸門(十一)木(十二)第二頸門(十三)第三頸門



八類ト他ノ有脊骨類ト胎ノ嚙發ヲ比較ス

四生物ノ面部嚙發ヲ比較ス



第一圖(八)胎
第二圖(三)尿管
第三圖(三)尿管胎膜
第四圖(三)手(足)空處
即(手)胎房(足)尾

第十七圖(五)內胞(六)外胞(七)中心內胞(八)守口內胞
第十八圖(五)胎兒外膜(六)外胞(七)內胞(八)圓環(九)空處
第二十圖(五)胎兒外膜(六)後皮(七)胎(八)前皮(九)空處

第三十圖(三)胎
發育(五)內外胞(六)胚(七)空處
發育(五)二變(六)內胞(七)外胞(八)卵(九)二團(十)卵(十一)空處
同上切半
縱截(三)多(四)乳(五)卵(六)胎

第十二圖(三)十四(五)十五(六)十六(七)十八(九)十九(十)二十(十一)二十三(十四)十五(十六)十七(十八)十九(二十)二十一(二十二)二十三(二十四)二十五(二十六)二十七(二十八)二十九(三十)

胎(三)腸胞(四)殘餘(五)胎核
胞(六)實(七)內胞(八)外胞
同(八)個(九)十九(十)空

⑤人胚ハ千八百五十年ヨリ同五十九年ニ至リ刊行セラルル加氏生理圖說第三十号表第二圖ニ據ルニ胚長ハ一英寸ノ十二分ノ十ナリシガ此圖ハ遙カニ大ヲ加フル者ナリ
 狗胚ハ千八百四十五年刊行
 微書弗狗胚揚發論第三十號

猿類ハ嬰兒ニ異ナルハ其漸ヤク長ズルハ後ニアリ然レモ猿子ハ狗子ニ異ナルハナホ人子ハ狗子ニ於ケルガコトニ是レ或ハ奇異ナリトスル者アルベシト雖モ確乎タル實事ナリト今コトニ暢發ノ同度ニ屬スル人獸諸種ノ胚圖ヲ示シ、以テ未ダ之ヲ一見セザル讀者ノ参照ニ供ス孰レモ正シキ著書ニ據レリ⑤第九圖ヨリ第廿六圖ニ至ル、
 人類ノ胚ノヨク哺乳類ノ胚ニ類似スル所以ハ以上ニ擧グル諸大家ノ說ヲ以テ既ニ明了ナリ

人 類 論 卷 第 一 章 第 一 節 第 一 圖

表第四十二圖
 ノ乙ニ據ル是
 レ胚胎二十五
 日ニ至リシハ
 ニシテ此圖ハ
 五倍ヲ加フル
 者ナリ
 ○博士哈屈禮
 人類天籍考及
 哈密爾氏造
 化史論ヲ參考
 セシ
 ◎千八百六十
 年印行米國學
 術院報告第四
 卷第十七葉ニ
 於ケル博士准

何ゾ更ニ余ガ喋々スルヲ須ンヤ然リト雖モ諸
 部ハ造構漸ク長ズルハ後ニ及ンデハ人胚
 ハ獸胚ニ類似スルトコロアリ敢テ論述セザル
 ヲ得ズ初メ心臟ハ微跳スル一管ニスギズ糞尿
 トモニ一ノ便道ヨリシ尾ハ真ノ獸尾ノ如ク突
 出シテ脚芽ノ外ニ達ス因マタ總ツテ氣生有脊
 骨動物ニ「コ」ルボラウアル「ア」ナトイフモノアリ
 是レ魚ハ腎臟ニ類似シ其効用モ「タ」之ニ均シ
 キ者ナリ◎胚サラニ長ズルノ後ト雖モ人類ト
 獸類ト判然符合スルトコロ多シ微書弗曰ク胚

滿ノ説ニ據ル
 ◎滿氏有脊
 骨動物解剖論
 第一卷第五百
 三十三葉ヲ見
 ヌ
 ◎千八百六十
 八年印行人腦
 迂曲論第九十
 五節
 ◎有脊骨動物
 解剖論第二卷
 第五百五十三
 葉
 ◎千八百六十
 三年印行波那
 我博物學社報

胎七箇月ハ終ニ方テ人腦ハ迂曲成壯ナル猴腦
 ハ迂曲ト暢發ハ度ヲ同カセリト◎マタ博士窩
 藍ハ佇立及ビ行歩ノ際大指ノヨク人體支柱ト
 ナルハ人類ノ身體造構ニ於ケル特殊ノ質ナリ
 トス◎ト雖モ博士准滿嘗テ長一英寸許ノ人胚
 ヲ見シニ其大指却テ他ハ諸指ヨリモ短カク如
 フルニ之ト平行セズ足脇ヨリ角度ヲナシテ外
 ニ向フ下實ニ四足類ノ永ク然ルト異ナラザリ
 シトイフ◎余ハ今博士哈屈禮ノ言ヲ引用シテ
 此局ヲ結ントス同氏ハ自カラ人類ト狗鳥蛙魚

且論 卷一 四十五

告第九卷第百八十五葉

◎人類天籟考第六十五葉

◎千八百六十七年印行母の泰博物學社年報第八十一葉中博士嘉彌斯

ト生發ヲ異ニセリヤト問ヒ、マタ自カラ之ニ答ヘテ、人類生發ノ方法ト暢發ノ起初トハ、其事情全ク一等下等ナル動物ニ同ジキハサラニ論ヲ俟タズ、實ニ是等ノ事件ヲ以テ人類ノ猿類ニ類似スルハ、猿類ノ狗類ニ於ケルヨリモナホ切ナリトイヘリ◎、△

身體造構、肉筋五官、毛髮骨散、生殖機等ノ不具ヲ論ス

前二題ノ緊要ナルハ、敢テ本題ニ讓ラズト雖モ、本題ハ故アリテ、更ニ詳論スルヲ要セリ◎抑高

的里内ノ論文ヲ讀ミ願ル得ルトコアラリ
○哈客爾氏ニ
タ形象論綱目
ト造化史論中
物原難問ノ題
目ヲ設ケ之ヲ
論セリ

等動物中、一トノ身體ニ不具ノ機關ヲ存セザルハナシ、然ノ人類モ亦此通規ヲ脱セザル者ナリ、所謂不具ナル機關ト暢發起初ナル機關トハ之ヲ區別スルノ難シ、然リト雖モ各判然其質ヲ異ニスル所アリ、不具ナル機關ハ男性四足類ニ存スル乳房若クハ反齶類ハ齶齶ニ埋没セル齒ノ如ク悉皆不用ニ屬スルカ、又ハ其用アリテ極メテ微少ニハ現情サラニ暢發スベキ所以ナキモハナリ、然リ而シテ或ハ微少ナリテ其用ヲ存スルモノハ、純然タル不具ノ機關ト看做スベキニ

組論卷一

四十六

非ルモ、勢ハ既ニ此部ニ屬セザルヲ得ズ之ニ反シテ暢發起初ナル機關ハ未ダ完全ナル度ニ達セズト雖モ、益暢發ハベキ所以アリテ之ヲ存スル者ニ必用ナリ、彼ノ不具ナル機關ハ愈變化シ愈衰頹セリ、是ハ其全ク不用ニ屬シ、又ハ其ヤハ不用ニ屬スル所以ナリ、斯ノ如キハ、後來サラニ天然ノ撰擇ニ遭遇スベカラザル者トス、マタ或ハ既ニ悉皆不用ニ屬シ、込滅ヲ取リシモノアリ、然レモ悉皆込滅ニ屬セシモノ復タ體部造構ハ復古ニ際シ或ハ再ビ現出スルアリ、此等ハ意味

深長ナルモノナリ、抑種々ノ機關ヲノ不具タラシメシ所以ノ原由ハ之ヲ按ズルニ、概テ成年ニ至リ之ヲ使用スベキ時節ニ方テコトニ之ヲ使用セザルト、若干年齒ニ至リテ、恆例現出スル遺傳トニアリ、然レ不使用トハ、タハニ其筋力活動ハ廢絶ヲイフノミナラズ、ナホ之ヲ壓抑スル重カハ、減省マタハ故アリテ之ヲ緩急弛放スル習慣ヲ生ゼシヨリ、其部其機關ニ於ケル血液循環ハ滯滞ヲイヘリ、マタ兩性中、一性ニ於テハ、悉ク完全ナル部分タリ

大組論 卷一

◎千八百六十
九年印行動物
學社報告第七
卷第九十二葉
三讀里美學的
二氏ノ評アル

此ノ如キハ、コ、ニ論ズル所ト、迥カニ其原由ヲ
異ニセリ、其所以ハ後ニ詳カナリ、マダ風俗習慣
ハ變革ニ由テ、俄然機關ハ生物ニ妨害トナリ、天
然撰擇ハ爲ニ衰頹セラレシ者アリ、且身體生長
上ニ生ズル應報ト、經濟トハ二由アリ、間接ニ此
ハ如キ衰頹ヲ促セリ、然レバ衰頹ノ度愈加ヘ、不
使用ノ影響愈顯ハレ去リ、而シテ他ニ生長上ノ經
濟ヨリ生ズル所ノ利益トテモ、殆ンド見ルベカ
ラザルニ迫ンデハ◎此衰頹ノ所以ヲ究察スル

◎養訓動植變
進論第二卷第
三百七葉第
三百九十七葉
及ビ生物祖宗
論第五版第五
百三十五葉ヲ
參見セヨ、
◎千八百五十
二年印行動物
學年表第三科
動物部第十八
卷第十三葉ヲ
見ヨ

ニ苦メリ、夫レ漸ヤク不使用ニ屬シ、以テ形狀ノ
極衰ヲ呈シ、而シテ既ニ全ク其踪跡ヲ彼ノ應報ト
經濟トニ絶チシ者、悉皆消滅スルハ、是レ即チ本
部ヲ成立スル分子ノ悉皆子孫ニ遺轉セシ所以
ナリ、不具ノ機關ニ係ル問題ハ、向ニ撰述セル二
部ノ書中ニ究論セリ◎故ニ深クコ、ニ贅セス、
肌筋ハ不具ナル者ハ、人體ハ諸部ニアリ◎獸
類ニ於テ或ハヨク暢發スルモ、人類ニアリテ非
常ニ衰頹セリ、彼ノ動物ノ皮膚ヲ伸縮スル力ア
ル如キハ、ヨク人ノ知ル所ナリ、其例馬ヲ以テ著

大組論 卷上

四十八

シキ者トス、是レ少肉筋絡ノ完全ナルヲ以テナリ、人體ニ此筋絡ノ判然タル遺物アリ、額筋ノ眉毛ヲ上下セシムル如キ者はナリ、頸側ニ生長セル廣頸筋モ亦此筋絡ノ部分ニ屬セリ、壹丁不ノ博士土耳拿ノイヘルニ、肩胛ノ近傍膈肋底等ノ五箇所ニ於テ、同氏が屢檢出シタル肌筋モ、ミナ此筋絡ノ部分ニ屬セリト、且マタ其論說ニ見ヘケルガ、六百有餘ノ體ニ於テ獸胸筋ノ一種ヲ存スル者實ニ百中三ニ居レリ、而ルニ是等ハ腹直筋ノ伸延セル者ニ非ズ、マタミナ此筋絡ノ一

④千八百六十六年ヨリ同六十七年ニ至ル壹丁不學士會院報告第六十五葉ニ於ケル博士土耳拿ノ說ニ據ル

部ニ屬スル者ナリキ、今此筋絡ノ例ヲ以テ之ヲ考フレバ、不具ノ造構及ビ平常ニ異ナル者ハ殊ニ其配置ノ變化ヲ經ル、最モ明カナリ、マタ世ニ人アリ、或ハ頭頂ノ皮膚ヲ伸縮セシムル筋力ヲ有セリ、此筋力ハ容易ニ變轉シ、加フルニヤ、不具ナリ、徳于得氏嘗テ此筋力ノ遺傳ニ係リ、而ノ非常ニ暢發セル者ニ就テ語リシ、アリ、抑同氏ノ知己ニ、當時一家ノ主人トナリシ者アリシガ、其幼時頭皮ヲ伸縮シテ、頭頂ヨリ屢數卷ノ書籍ヲ放投シ、マタ此技ヲ博シ、爲ニ巨

八且論卷一 四十九

利ヲ贏得シタル者アリ、而ノ其父伯祖父并ニ其
三子トモ、俱ニ此筋力ヲ有セシテ、同ジク非常ニ
出デタリ、此家ハ當主ヨリ八代以前ニ嘗テ分レ
テ二家トナレリ、故ニ此宗家ノ當主ハ、支家ノ當
主ト七從兄弟ナリ、而ルニ此支家ノ當主ハ佛蘭
西ニテモ其居所ヲ異ニシケレバ、之ヲ探偵セシ
メシニ、同ジクマタ此筋力ヲ保存セル者ニテ、立
ドコロニ之ヲ實施シ、觀者ヲシテ大ニ驚カシメ
タリ、是レ即チ此無用ノ筋力ハ正シク遺傳シタ
ル一例ナリ、而シテ此筋力ハモト彼ハ半人半獸ナ

④千八百七十
三年印行人獸
情激發色論第
百四十四葉ヲ
見ヨ

⑤嘉福斯の里
内氏比耳的爾
ノ書ヲ引用シ
テ千八百六十
七年印行博的
際博物學社年
報第九十七葉
同說ニ歸セリ

ル遠祖ヨリ傳來セル下ニタ疑ナシ何ニトナレ
バ猿類ハナホ此筋力ヲ全有シ以テ其頭皮ヲ上
下伸縮スレバナリ⑤
耳郭ヲ轉動スル虚用筋筋及ヒ他ハ諸部ヲ運用
スル實用筋筋ハ人類ニ於テ甚ダ不具ナル者ナ
リ、此等ハミナ少肉筋絡ノ部分ニ屬シ其暢發及
ビ效用等マタ大ニ不同アリ、嘗テ三名ノ人アリ、
其一人ハ耳郭ノ全部ヲ前ニ抽キ、他ノ一人ハ之
ヲ上ニ抽キ揚ケ、ナホ他ノ一人ハ之ヲ後ロニ抽
キ得タリ⑥而シテ其一名ノ談話ニ據レバ人ミナ

物ヲ以テ耳ニ觸レ、以テ之ニ注意シ、數此ノ如クシテ練熟セバ往昔曾テ失セシ筋力ノ運用ヲ回復シ得ベシトイフ、夫レ耳郭ヲメ或ハ立テ、或ハ傾ケ、或ハ四方ニ運轉セシムル筋力ハ、ヨク危難ノ將ニ來ラントスル方位ヲ知ラシムルノ効用アリ、諸動物ノ爲ニ須臾モ缺クベカラザル者ナリ、人類ニ於テモ、タ其有益ナルハ論ヲ俟ダズ、然レ未ダ曾テ此筋力ヲ具有セル人アルヲ聞カズ、意フニ人類ノ耳郭ハ凹凸稜谷狀ノ部分(正耳邊、反耳邊、正耳珠、反耳珠等ト共ニ、一ノ不具

④千八百六十年印行的即未耳病論第十二葉○生理學ノ大家普禮氏が近來耳郭ノ効用ヲ究察セシ結果モ、マクコ、ニ出デタリトイフ、

ナル機關ナリ、然レモ獸類ノ耳郭ハ、樹ツニ此凹凸稜谷狀ノ部分ニ由テシ、而シテ此等ノ部分ハ聊カモ耳ノ重量ヲ増加セズシテ、之ヲ堅實シ、之ヲ支柱スルヲ得ルナリ、コ、ニ一ニ論者アリ、耳郭ノ軟骨ハ音波ノ波動ヲ聽神系ニ通ズルノ効用アリトセリ、因テ的印未氏ハ(完)特ニ此一事ヲ研究シ、普子ク類例ヲ蒐集セシニ、一モ其然ル者アラザリケレバ、終ニ耳郭ヲ以テ主用ナキ者トセリ、然リ而シテ、シパンシ、及ビヲラングノ耳ハ、奇怪ニモ人類ノ耳ニ彷彿タリ、其筋モマタ漸

生理學 卷一 五十一

①千八百七十一年印行博物雜誌第七卷第三百四十二號ニ於ケル博士麥嘉理斯博士ノ説ニ據ル

ヤク僅カニ暢發セリ⑤、余嘗テ之ヲ生物園ノ監者ニ聞ケリ、猿類ハ曾テ耳ヲ動カセシメテク、之ヲ樹立セシメテモナシト、獨リ効用ノ點ヨリ論ズルニ、猿類ノ耳郭ハ、マタ人類ノ耳郭ト同シク、全く不具ナル者ナリ、然レド、猿類及ビ人祖ノ何ニテ此立耳力ヲ以テ失セシヤハ、得テ知ルベカラズ、一種ノ説ニ據レバ、此等ノ動物ハ特ニ林間ニ生活スルノ性慣ヲ成シ、加フルニ強大ナル力量アリ、之ニ因テ危難ニ遇フニ甚ダ稀ナリ、故ニ耳郭ノ運用漸ヤク減シ、久クシテ遂ニ此運用力ヲ全

失スルニ至レリトイフ、是レ洋中ノ島嶼ニ生活スル鳥類ガ羽翼ヲ存シ、ナホ輕飛スル勢力ヲ失セシ所以ハ、賊獸ノ襲撃ヲ免カレシニ因ル者トスルト、其理一ナリ、然レド余ヲ以テ之ヲ觀レバ、此説未ダ妥當ナラザル者ノ如シ、夫レ人猿耳郭ノ運用ヲ廢失スルニ至リシハ、固ヨリ他ニ之ヲ償フ者ナカルベカラズ、抑此ニ生物ハヨク頭顱ヲ左右ニ回ラシ、顧眄意ハ如キヲ以テ、音ヲ四方ニ聽カハ自由ヲ有セリ、是レ之ヲ償フハ良能トイフベシ、マタ耳聾ノアルハ獨リ人類ニ歸セリ

祖論 卷一

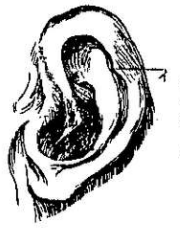
五十二

◎千八百七十三年印行仙意日美漆的氏解訓蒙卷三百九十六葉ヲ見

祖論卷一

トスレバゴリヲマタ其不具ナル者ヲ存セリ
 而ノ博士普禮亞ニ據レバ、黑人ノ如キハ却テ之ヲ存セザル者多シトイフ、
 彫刻ノ名工、烏耳拿氏ハ、嘗テ男女ノ耳郭ニ一箇ノ奇處アルヲ發見セリ、ツラツラ其所以ヲ尋ヌルニ烏氏一日天人ノ像ヲ彫刻シツ、アリシニ、偶マ其耳ヲ失ラシメタリケレバ、其事忽然トノ烏氏ノ思想ヲ籠絡スル所トナリ、ソレヨリ諸猿類ノ耳ヲ檢察シ、竟ニ人類ノ耳ニ及ボシ、博ク之ヲ查覈セシガ、ミナ耳郭ノ内縁ヨリ内ニ向テ凸

第十二圖



第 人類ノ耳 烏耳拿氏ニ據ル

起スル一點ノ鈍角アリ、而ノ之ヲ存スル者ハ、出生ノ際ヨリ已ニ然リト、美約氏ニ據レバ、耳角ノ存スルハ婦人ヨリモ男子ニ多シトイフ、後ニ烏耳拿氏ハ其雛形ヲ作り、而ノ余ニ贈ルニ上ノ圖ヲ以テセリ、
 (第二十七圖)
 此耳角ハ耳ノ中心ニ向フノミナラズ、マタ耳ノ平面ヨリ少シク外ル趣向アリ、故ニ顔面ニ臨ム

祖論卷一

ニ真向ヨリスル耳、之ニ對スルニ正背ヨリスル
耳、之ヲ認ルヲ容易ナリ、然ノ其大ニ不同アリ常
ニ一定セズ、位地モ或ハ少シク上ナルアリ、或ハ
少シク下ナルアリ、且左右兩耳ノ中一方ニノミ
アリテ、一方ニナキモアリ、此耳角ハ敢テ人類ニ
ノミ歸セズ、英國生物園ニ於テ蜘蛛猿アテルス
ピールツブスノ中ニモ其例ヲ觀タリ、マタ學士
蘭觀士德ノ説ニ、寒堡生物園ニ「ジパンジ」ノ
等シク此耳角ヲ存スル者アリト聞ケリ、蓋シ耳
郭ノ究縁ハ概テ内側ニ轉疊シ、其疊襞ハ耳郭ノ

⑤千八百六十
九年印行動物
學社報告第七
卷第六葉同第
九十二葉ニ載
ル、誠里、英學
二氏ノ論説ト
シ、ミエリゾ
ノ圖トヲ見
ヨ、
⑥千八百七十
一年印行解例

全部後ロニ附着セル情狀ト相符合スルモノ、
如キ形狀アリ、而ルニ「バブーン」及ビ「マカカス」ノ
一種ノ如キ、等位ナホ未ダ高カラザル猿類ニ於
テハ③耳郭ノ上部多ク尖銳ヲナシ、然レモ其究縁
更ニ内側ニ轉疊セル形狀ナシ、然レモシ之ヲ
轉疊シタランニハ、輒チ其耳果シテ耳角ヲ生シ、
而シテ此耳角ハ耳ノ中央ニ向テ内側ニ凸起シ、其
角頭ヤ、外トニ向フベキ形勢アリ、所謂耳角ハ
生セシモ、ハハニ出シト明白ナリ、然レモ美約氏
ハ其説ヲ異ニシ、近來著述ノ書中ニ於テ④此耳

角ニ論及シ、一ニ之ヲ偶然ニ歸セリ、其意以ラク
此耳角ノ凸起セルハ、敢テ實因アルニ非ズ、タ
其左右ニ不具ノ軟骨アリ、以テ然ラシムルニ出
ルト、此說ノ如キソレ或ハ是ナラン、蓋シ美約氏
ノ說ヲ以テ之ヲ考フレバ、耳郭ニ小點多クシテ
且高低アリ、辯解其宜キヲ得タル者ノ如シ、余マ
タ學士德温ノ爲ニ小頭痴子ノ耳ヲ一見スルヲ
得タリ、而ルニ此耳ニ於テハ、彼ノ凸起セル耳角
ハ内側ニ轉疊セル緣ニアラズ、耳郭ノ外緣ニ
アリタリ、是ニ由テ之ヲ觀レバ此耳角ト舊耳頭

ト更ニ關係ナキ者ノ如シ、然リト雖モ、余カ所謂
耳角ハ、初ノ立形尖頭ナル耳頂ノ餘痕ナルハ、堅
ク信ジテ疑ハズ、是レ其例最多クシテ而シ、其
位地殊ニ尖頭ナル耳頂ニ符合スレバナリ、ナホ
一種ノ例ハ、余嘗テ友人ノ贈寄ニ係ル寫真ニ就
テ之ヲ見タリシガ、其耳角甚ダ巨大ニシ、若シ之
ヲ以テ美約氏ノ說ノ如キ者トナシ、耳郭ノ全境
ニアル軟骨ヲノ齊シク其暢發ヲ全ウセシメナ
バ、耳ノ全部三分ノ一ハ此耳角ノ爲ニ覆ハル、
ニ至ルベシ、其他更ニ二箇ノ例アリ、一ハ北亞米

⑤人獸情働發
色論第百三十
六葉

利加ノ人ニハ英國ノ人ナリシガ孰レモ耳郭ハ上部決メ内側ニ轉疊セル形勢ナク却テ尖頭ヲナシ其狀恰カモ本來四足類ノ耳ニ於ケル尖頭ノ如シ中一ハ嬰兒ナリシガ其父一日之ヲ余ガ著書⑤ニ載スル猿耳ノ圖ニ照較セシニ自カラ其嚴ク類似セルヲ驚キ來テ之ヲ余ニ示セリ實ニ此ニ例ノ如キヲ以テ正シク其耳緣ヲ内側ニ轉疊シタランニハ彼ハ内側ニ凸起セル耳角ハ生ズベキハ必然ナリナホ更ニ二種ノ例アリ耳ノ上部判然内側ニ轉疊シ一ハ殊ニ狹隘ナ

第二十八圖



「フラング」ノ胎兒

以テ見ルニ足レリ此ハ如キ耳頂轉疊セバ後來成長ヲ經テ變轉スルニアラザル以上ハ必ず彼

リシカド之ヲ要スルニ其形ミナ尖頭ヲ成セリ上ノ圖ハ即チ學士「樹」追ノ贈附ニ係ル「フラング」ノ胎兒ノ真影ヨリ謄寫セル者ナリ當時耳ノ尖頭ナル大ニ成年ニ異ナル所

八且論卷一

五十六

④千八百四十二年印行、美拉氏生理訓蒙、英譯第二卷第一、十一百一十七、葉爾遜氏有脊骨動物解剖論、第三卷第二百、六十葉、千八百五十四年十一月八日、動物學社報告中同氏

ハ耳角ヲ成スニ至ルベシ、到底論ズルトコロノ耳角ハ、人類猿類ヲ問ハズ、其先全ク尖耳ナリシ明證ナリ、(第二十八圖)

翁眼膜即チ第三眼胞ハ、附屬ノ肉筋及ビ其他ノ結構トモ、鳥類ニ在テ殊ニヨク暢發セリ、此膜ハ眼球ヲ露被スルノ急カナルヲ以テ、之ガ爲ニ太ダ緊要ナルモノナリ、且此ノ如キモノ、爬蟲類、水陸兩生類、及ビ鮫等ノ如キ魚類ニアリ、單穴類、有袋類ノ如キ下等哺乳類、并ニ海馬ノ如キ一二ノ上等哺乳類ニ於テモ、マタヨク暢發セリ、然リト

ノ海馬論、註、氏畫學解剖學名家集、第六百六葉、加爾海、的、人類論、譯、第百二十九葉ヲ見

雖モ人類、四手類、及ビ他ハ哺乳類ハ過半ニ在テハ、半月胞ト名ヅクル一ハ不具ナルモノハ、ニギザルハ、ミ、是レ普子ク解剖家ノ觀テ以テ疑ハザル所ナリ、(圖)

臭官ハ哺乳類ノ爲ニ緊要ナルモノニテ、反嚼類ハ藉テ以テ危難ヲ探知シ、食肉類ハ藉テ以テ餌食ヲ搜索シ、野猪ノ如キハ、更ニ此兩途ヲ兼ヌ、然レモ人類ノ如キハ、之ヲ以テ全ク爲スナキニアラザルモ、其用見ルベキモハナシ、獨リ黒人種ハ、之ヲ白人種及ビ其他ノ開明セル人種ニ比スレ

且論 卷一

五十六

〇金海衛的南
 味土人ノ臭官
 係ル説ハ已
 ニ世ニ明カニ
 ノ又諸家ノ信
 方所ナリ
 方藏氏屢經驗
 セシニ黑人又
 ビ米國ノ土人
 ハ其臭官ニ由
 テ暗處ニアル
 人ヲ識別シ得
 ルトイフ(千八
 百七十二年印
 行心能學第一
 卷第九十一頁
 〇學士阿爾取

此官能ノ活用ヤ、進出スル所アリ、然レモ之
 ヲ前述諸獸類ニ比スレバ、其及バザルヤ遠シ
 實ニ何等ノ人種ト雖モ、之ニ由テ危難ノ來ラン
 トスルヲ偵知シ、又ハ之ニ由テ食物ヲ求メ得タ
 ル者未ダ曾テ之アラズ、義斯基蒙人ノ如キモ、爲
 ニ不潔ノ氣中ニ安眠スルヲ得ザリシ者ナク、諸
 齋モ爲ニ腐敗物ヲ喰ハザリシ者ナシ、嘗テ有名
 ナル博物學者ニ、殊ニ銳異ナル臭官ヲ有シ、マ
 タヨク此問題ヲ研究セル人アリシガ、歐羅巴人
 ト雖モ、各此官能ヲ異ニストイヘリ、人類ノ現有

ハ臭官ノ能力
 及ビ皮色ノ料
 質ト相關スル
 所以ノ奇事ヲ
 發見セリ故ニ
 余一タ本文中
 黑人ノ臭官ノ
 白人ニ優ル所
 以ノ説アリ
 千八百七十年
 倫敦印行外療
 報告第五十三
 卷第二百七十
 六葉ニ於テ舍
 氏ノ論説ヲ見

スル臭官ノ如キハ、從來斯ル不具ナルモノナリ
 トハ、遞進論者ノ容レザル所ナリ、ハレ此臭官タ
 ルヤ、初メ祖先ハ爲ニ緊要ナル効用アリ、テ其常
 ニ使用セシモハナルハ疑ナシ、然レモ其人類ニ
 遺傳スルニ迄、ハテ漸ク不具ハ機關トナリシ
 モハナリ、犬馬ノ如キ此官能ノ殊ニ秀ズル獸類
 ハ、人物場所等ヲ記憶スルモ、一ニミナ其臭官ニ
 ヲレリ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、學士蒙圖禮ノ言ノ
 如ク、**◎**人類ヲタヨク臭官ニ由テ、既ニ忘失セル
 事件、場所等ヲ記認シ、活然其事實、情態ヲ回想シ

且論卷一

五八〇

一千八百六十八年印行人心性理及病理論 第二版第百三十四葉

得ル所以ノ理得テ解スベキナリ、人類ハ赤身ナルヲ以テ、高等哺乳類ニ異ナリトイフト雖モ、其實人類全ク赤身ナル者ニ非ズ、男子ハ現ニ身體諸部ニ黒毛アリ、婦人ハ其毛甚ダ細小ナリト雖モ、之ヲ欠ク者ニ非ズ、然リ而人、人類其種族ヲ同ウセザレバ、幾何カ其毛髪ヲ異ニセリ、同種ノ人類ト雖モ、ナホ毛髪ノ同ジカラザル者アリ、多少ノ度ヲ異ニスル者アリ、有無其處ヲ一ニセザル者アリ、故ニ同ジク歐羅巴人ニノ、肩全ク無毛ナルモアリ、其甚ダ多毛ナル

一千八百三十七年印行、後拉氏解剖及生理學第四十七節ニ於テ、毛格陸的人体生毛ノ方向ヲ論ズル文ヲ見ヨ

モアルナリ、蓋シ毛髪ハ身體ニ散布セル此、ハ如キハ、即チ獸類ノ毛衣ト同物ニ、タハ其暢發ハ停止セルニスギガルハ、其所以ハ四肢及ビ身體ノ諸部ニ生ズル灰色細小ナル短毛モ、或ハ衰老ニ迫ンデ赤色トナリタル皮膚ヲ於テ見ル如ク、偶然暢發シテ、黒色長大ナルモノトナルアルヲ以テモ明瞭ナリ、慈護士、巴日的君嘗テ余ニ語テ曰ク、一家族ノ中、或ハ數人ノ者、其眉毛薄少ニシ、而シテ他ニ比スレバ、更ニ長大ナル者アリ、且此ノ如キ小事ト

且論 卷一 五十九

千八百五十三年刊行、巴日的氏外科論第一卷第七十一葉ヲ見ヨ

雖モ、マタ遺留ニ出デタリト、此類マタ獸類ニアリ、ジンパンシ「マカカス」等ニ人類ノ眉毛ニ等シク、眼上ノ赤膚ヨリ發生スル疎毛アルアリ、マタ之ニ類似スル長毛ノ或ル「マアーン」ノ眉嶺ヨリ疎生スルモアリ、
人胚第六箇月ニ至リテ厚被スル、彼ノ羊毛ノ如キ細毛ハ、更ニ奇ナリトイフベシ、此細毛ハ胚胎第五箇月ニ迄シテ始メテ眉ト面トニ生シ、特ニ口邊ニ於テス、コヽニ其長キヲ頭髮ノ右ニ出ズ、義悉格陸的嘗テ女胚ニ細鬚ノ生ゼルヲ見タリ

義氏外科論第四十及第七十七節

トイフ、
此ノ如キハ驚クベキニ似タレド、決メ然ラズ、其故ハ生發ノ初メ、男女両性均シク外貌ヲ以テ相類似スレバナリ、且胚ノ全部ニ生ゼシ毛髮ハ、容易ニ變轉スト雖モ、其方向ト配置トハ少シモ成人ト異ナル所ナシ、其全體ニ叢生スルヤ、額耳ト雖モ悉ク之ヲ蔽フテ殘サズ、特リ掌ト蹠トハ全ク無毛ナリ、其情ナホ獸類ニ於ケルガカトシ、人類ト獸類ト斯ク生毛ハ符合スルハ、豈偶然ナランヤ、人胚ヲ被覆スル毛髮ハ、即チ畢生之ヲ厚被スル、彼ハ哺乳類ハ毛衣ヨリ來リシモ

人且論

六十一

⑤養馴動植變
 進論第二卷第
 三百二十五葉
 フ見ヨ○魯細
 如キ異常ノ性
 質ヲ具フル者
 アリ博士貌蘭
 德其眞影ニ救
 フ以テ巴避府
 ヲリ余ニ贈與

ハナリ、現ニ人類ノ面部ヲモ殘サズ、全身生レナ
 ガラニソ長毛ノ繁生セル者アリ、其例ニ就キ余
 ガ聞クトコロ已ニ數回ニ及ベリ、而シテ此ノ如キ
 者マタ遺傳ニ係リ、加フルニ此事アレバ、マタ必
 ズ其齒牙平常ニ異ナルアリ、此二件約子連發セ
 リ、^④博士亞歷山大、貌蘭德嘗テ前顯ノ如ク、生來
 多毛ナル人ノ齡三十五歳ニ及ビシ片ノ面毛ヲ
 以テ之ヲ人胚ノ細毛ト比較セシニ、全ク其組織
 成立ヲ同ウセリトイフ、是レ親シク同氏ニ聞ク
 トコロナリ、此ハ如キハ所謂人類ニ於テ毛髮ハ

セリ

暢發停住シ、其生長モマタ停住セルモノニテ、到
 底獸毛ハ如キ完全ナルモノトナルベカラザル
 ハ明證ナリ、マタ小兒病院ニ屬スル外科醫師某
 ノ說ニ據レバ、嬰兒ノ背ニ長毛ノ繁生スル者甚
 ダ多シトイフ、是レマタ前件ト其所以ヲ同ウス
 ル者ナリ、
 人類ハマハ開明シタル種族ハ、奥ハ慧齒漸ヤク
 不具トナルハ勢ヲ醸セリ、何ニトナルハ此等ハ
 齒ハ、^①シハパンシ、^②シハラン、^③シハ等ニ於ケル如ク、益
 他ハ慧齒ニ劣リ、其齒脚モ二本トナリタリ、而シテ

人類

卒

◎千八百六十
七年七月刊行
人類學評論第
二百九十九葉
學士伯來氏ノ
引用セル學士
維伯人猿牙齒
論ニ據ル
◎高薩氏有脊
骨動物解剖論
第三卷第三百
二十回二十一
同二十五葉ヲ
見

年齒殆ハト十七歳ハ比ニ及バサレハ其生バル
下ナク加フルニ之ヲ他ハ齒ニ比スレバ速カニ
損落スルヲ以テナリ然レバ有名ナル齒醫ニ
此説ヲ採ラザルモアリトイフ凡テ此等ノ齒ノ
造構ト成長ノ時期トハ他ノ諸齒ヨリモ甚ダ不
規則ナルモノアリ也マタ瑪拉尼安族ノ慧齒ハ
却テ強壯ニ其齒脚三本アリ而ノ之ヲ他ノ慧
齒ニ比スレバ其相異ナルハ僅小ニ白人種
ニ於テ其異ナルノ非常ナルガ如キニ非ルナリ
博士書方仙ハ諸人種ノ中ニ此ノ如キ不同アル

◎千八百六十
八年十月刊行
人類學評論第
四百二十六葉
ニ載ル獨體古
形論
◎學士孟的辯
論ニ據ル
◎贈書ニ據
レバ同氏モ頃
若人類諸種ノ
與齒ヲ研究シ
タルニ人類愈
開明スレバ其
齒愈瘦耗スル
所以ヲ明カニ
シ本文ト同論

原由ヲノ開明セル人種ノ顚骨ノ後部ヤ、短縮
シテ、ヨク齒牙ヲ成長セシムルニ勝ヘザル所以
ニ歸セリ也而ノ余以爲ラク開明セル人種ノ顚
骨ノ後部短縮セル所以ハ其常ニ精製烹熟ノ食
ヲ喫シ、以テ其顚骨ヲ強用スル罕ナルニアリト
マク貌禮士氏ノ言ニ、合衆國ノ人民往々其小兒
ノ若干齲齒ヲ除去スル者アリ、現時ハ殆ンド一
國ノ風習ヲ成セリ、是レ即チ其生齒ヲノ悉皆成
長セシムルヲ難ンズル所以ナリトイヘリ也
飲食ノ通路ニ就テ論ズベキハ、先ヅ腸支ニ屬ス

ニ歸セリト云
 高麗氏有脊
 骨動物解剖論
 第三卷第四百
 十六、四百三十
 四、四百四十一
 葉ヲ見ヨ

ル蚯蚓狀ハ不具物ナリ、腸支ハ大腸ノ支派ニ
 其一端ハ閉塞ス、下等食草哺乳類ニ於テハ、其長
 非常ナル者アリ、彼ノ有袋類ノ女性ノ如キニ於
 テハ全身三倍餘ノ長キニ及ベリ、其形質タル
 ヤ、或ハ伸テ尖圓ヲナスアリ、或ハ屈シテ蜷縮ス
 ルアリ、マタ食物ヲ變ジ、風習ヲ革メシ等ノ事故
 ヨリ、動物中或ハ腸支ノ長ノ減縮セシ者アリ、然
 ノ彼ノ蚯蚓狀ノ不具物ハ、宛カモ此腸支ノ減縮
 セル部分ノ蜷縮シテ不具物トナリシ者ノ如キ
 情狀アリ、此附屬物ハ不具タル所以ハ、其形狀ハ

千八百六十
 七年刊行母的
 隆博物學社年
 報第九十四葉

衰小セルヲ以テ之ヲ明知シ、且博士嘉福斯の里
 内ガ人類ニ於テ其變化スルヲ係リ集メタ
 ル諸例ニ由テモ之ヲ證認セリ、然リ而シテ生物ニ
 其全ク之レ無キ者アリ、其ヨク暢發セル者アリ
 管中其長ノ半バ若クハ三分ノ二、實シテ通透セ
 ザル者アリ、ヲラングニ於テハ此附屬物長クノ
 捲埋セリ、人類ニ在テハ短ナル腸支ノ端ヨリ出
 デ、直徑漸ヤク一英寸ノ三分一ニスギズト雖モ、
 其長約ソ四五英寸ニ及ブ者アリ、是レ帝ニ不具
 物タルノミナラズ、ナホ大害ヲ爲シ、屢死ヲ致ス

且論 卷一

六三〇

〇死ヲ致セレ
 例ハ馬珍士(子
 八百六十二年
 六月十五日印
 行中外評論中
 有撰本原論及
 ビ哈喀爾形氣
 論綱第二卷第
 二百七十八節
 ノ説ニ見ユ
 〇千八百七十
 三年二月十五
 日印行斯氏ラ
 ニモト論ト是
 ヲリ先ニ千八
 百六十三年一
 月二十四日刊

原由トナルアリ、近ク其例ヲ聞クト已ニ再三ナ
 リ、概子子實等ノ堅硬物此管中ニ入り、以テ激熱
 ヲ生ズルニ由レリ、
 下等四手類ノ數種、夜遊猿類、食肉類、及ビ數種ノ
 有袋類ニ於テ上臂骨ノ下端ニ一ノ骨孔アリ、之
 ヲ肱窩上孔トイフ、是レ前肢ノ神系及ビ動脈ノ
 往來スル所ナリ、人類ノ上臂骨ニ於テモ等シク
 マタ此ノ如キ孔痕アリ、動モスレハ完全ナル骨
 孔アリ、然ルレハ則チ概子交節筋アリテ、鈎形骨
 ノ先ヲ補充シ、圓圓ヲナシ、以テ此孔ヲ成セリ、學

行同論第八十
 三葉トヲ見ヨ
 〇諾屈氏醫學
 解剖學名彙集
 第六十三葉及
 ビ千八百六十
 七年印行聖彼
 構學術院報
 告第十二卷第
 四百四十八葉
 ニ於ケル學士
 額流婆ノ説ヲ
 參照セヨ
 〇千八百六十
 七年刊行格物
 學社報告第三
 百十葉學士仙

士^ス的^ト流^リ薩^ス、博ク之ヲ研究セシニ、父之ヲ有シ、
 而ノ其七子ノ四名マタ之ヲ存スル者アリ、因テ
 マタ此ノ如キ異常造構ノ遺傳スル所以ヲ發見
 セリ、苟モ此骨孔ノ存スルレハ、必ズ大神系之ヲ
 通過ス、是レ即チ獸類ニ於ケル肱窩上孔ト符合
 シ、而ノ其ヤ、不具タルハ明瞭ナリ、博士土耳拿
 嘗テ其數ヲ計算セシニ、近代骨骸ノ之ヲ存スル
 モノ殆ンド百分ノ一ニ及ベリ、
 上臂骨ニ肱窩内孔トモイフベキ更ニ一種ノ骨
 孔アリ、是レ人類、似人猿類、通常猿類、及ビ數種

原論 卷一 四〇

慈日美婆的ノ
 説ニ據ル
 ④千八百六十
 九年有以以前
 ノ建築研究ノ
 爲開設セル第
 三次萬國々會
 報告第百九十
 九葉崎不拉平
 達爾洞管論○
 學士准滿ノ説
 千八百七十
 一年刊行比薄地
 博物館第四年
 報第二十葉ニ
 據レバ合衆國
 ノ西部及ヒ福

下等猿類ニ通存セリ然ノ人類ニ在テハ古代
 ト今代トヲ比較スルニ之ヲ存スルハ古代ニ屬
 スル者ヲ以テ多シトス、婆士格氏⑤嘗テ此論題
 ニ係リ、廣ク諸例ヲ舉ルモノアリ、乃チ之ヲ觀ル
 ニ、博士貌路加ガ巴理ノ南部埋葬地ニ於テ檢出
 シタル臂骨百中ノ四個半ハ皆此骨孔アリ、阿羅
 尼ノ洞窟ニアリシハ、何レモ銅世ニ屬スル者ナ
 リシカ、其三十二個中必ズ八個ハ之ヲ存セリ、然
 レバ此ノ如キ比例ノ常ニ非ルハ、以テク一家門
 ニ屬スル洞窟ナラント、丟本氏ノ查出ニ係ル列

羅動ヲニ於テ
 發キタル古家
 ヲリ出シ人骨
 百分ノ三十一
 ハ、ミナ此骨孔
 アリ、マタ黑人
 往々之ヲ存ス
 トイフ

西谷中ノ洞窟ヨリ得タル骨骸ハ、此孔ヲ存スル
 モノ百中ニ三十ナル比例ヲナセリ、是等ハミナ
 馴鹿世ニ屬スルモノナリキ、列奎氏ガ亞漸丟爾
 ノ一墟ニ於テ發見シタルハ、此孔ヲ存スルモノ
 百中ニ二十五ノ割合ヲ成シタル、普流拿白氏ハ
 薄理由ヨリ出シ枯骨ヲ觀シニ、之ヲ存スルモノ
 百中ニ二十六ニ居レリ、且其言ニ之ヲ存スルハ、大
 概及安西族ノ骨骸ニアリトイヘリ、抑此等ハ事
 情トイヒ、其他ハ事件トイフハ、一モ人體造
 構ノ獸體造構ニ類似スル所以ヲ證セザルハ、ナ

千八百六十七年同六十八年印行學術雜誌第六百二十五號ニ於テ客得非地ノ説ヲ見ヨ○千八百四十年博物學者埃耳蘭ニ會セシホ布刺西曼有尾人胚ヲ以テ展觀ニ屬セリ本會臨席ノ解剖學者普ク之ヲ實察セリ千八百七十年十二月

シ、加之古代人類ハ之ニ類似スルハ、今代人類ヨリ更ニ切密ナル所以ヲ徵セリ、是レハ、タ、系譜上之ヲ離隔スル所以ナリ、
 尾龍骨ハ人類及ビ某種ハ有脊骨動物ニ於テ獸尾ハ効用ナシト雖モ、均シク是レハ他ハ有脊骨動物ニ存スル獸尾ナリ、特ニ胚生ハ始ニ在テハ其形狀純然タル獸尾ニハ判然胚ノ下部ヨリ突出セリ、其情狀第九圖ハ人胚ニ明カナリ、マ、タ、動物スレバ例外ナル者アリ、
 ⑤、
 ⑥、
 ⑦、
 ⑧、
 ⑨、
 ⑩、
 ⑪、
 ⑫、
 ⑬、
 ⑭、
 ⑮、
 ⑯、
 ⑰、
 ⑱、
 ⑲、
 ⑳、
 ㉑、
 ㉒、
 ㉓、
 ㉔、
 ㉕、
 ㉖、
 ㉗、
 ㉘、
 ㉙、
 ㉚、
 ㉛、
 ㉜、
 ㉝、
 ㉞、
 ㉟、
 ㊱、
 ㊲、
 ㊳、
 ㊴、
 ㊵、
 ㊶、
 ㊷、
 ㊸、
 ㊹、
 ㊺、
 ㊻、
 ㊼、
 ㊽、
 ㊾、
 ㊿、

印行學術雜誌第六百二十五號ニ於テ客得非地ノ説ヲ見ヨ○千八百四十年博物學者埃耳蘭ニ會セシホ布刺西曼有尾人胚ヲ以テ展觀ニ屬セリ本會臨席ノ解剖學者普ク之ヲ實察セリ千八百七十年十二月

短小ナル不具ハ尾ヲ存セリ、蓋シ尾龍骨ハ短ニノ通常四脊椎ヲ包有シ、而シテ其骨節固著セリ、且根底ノ一箇ヲ除キ其他ハ獨リ中心ノ部分ノミヲ以テ成リ、
 ①、
 ②、
 ③、
 ④、
 ⑤、
 ⑥、
 ⑦、
 ⑧、
 ⑨、
 ⑩、
 ⑪、
 ⑫、
 ⑬、
 ⑭、
 ⑮、
 ⑯、
 ⑰、
 ⑱、
 ⑲、
 ⑳、
 ㉑、
 ㉒、
 ㉓、
 ㉔、
 ㉕、
 ㉖、
 ㉗、
 ㉘、
 ㉙、
 ㉚、
 ㉛、
 ㉜、
 ㉝、
 ㉞、
 ㉟、
 ㊱、
 ㊲、
 ㊳、
 ㊴、
 ㊵、
 ㊶、
 ㊷、
 ㊸、
 ㊹、
 ㊺、
 ㊻、
 ㊼、
 ㊽、
 ㊾、
 ㊿、

人類ノ脊髓ハ漸ヤク背脊椎ノ極底若クハ第一腰脊椎ニ至ルニスギズ、然レバ、
 ①、
 ②、
 ③、
 ④、
 ⑤、
 ⑥、
 ⑦、
 ⑧、
 ⑨、
 ⑩、
 ⑪、
 ⑫、
 ⑬、
 ⑭、
 ⑮、
 ⑯、
 ⑰、
 ⑱、
 ⑲、
 ⑳、
 ㉑、
 ㉒、
 ㉓、
 ㉔、
 ㉕、
 ㉖、
 ㉗、
 ㉘、
 ㉙、
 ㉚、
 ㉛、
 ㉜、
 ㉝、
 ㉞、
 ㉟、
 ㊱、
 ㊲、
 ㊳、
 ㊴、
 ㊵、
 ㊶、
 ㊷、
 ㊸、
 ㊹、
 ㊺、
 ㊻、
 ㊼、
 ㊽、
 ㊾、
 ㊿、

六十六

薦部中心ヲ傳リ、ナホ尾龍骨ノ後部ヲ沿フテ究
下ス、博士土耳拿曰ク、此經髓ノ上部ハ一ニ脊髓
ニ同ジク、而ノ其下部ハ管膜ナリト、尾龍骨ハ已
ニ貫通スル骨髓ナレト雖モ、ナホ其踪跡ヲ存ス
ルハ分明ナリ、マタ尾龍骨ハ更ニ獸尾ニ符合ス
ル所以ハ證アリ、博士土耳拿ノ言ニ、拉西加近來
尾龍骨ノ極端ニ於テ、薦部中心動脈ト接續スル
不思議ノ捲埋物ヲ發見セリ、尋テ格羅、美約ノ二
氏猿(マカカス)尾及ビ猫尾ヲ檢察セシニ、其所在
ハ均シク窮極ニアラザリシカド、二尾各、マタ之

ニ類似スル捲埋物ヲ有セリトイヘリ、
生殖機ニ亦種々ハ不具ナルモハアリ、然リト雖
モコ、テ屬スルモノハ前諸件ト大ニソノ趣ヲ
異ニセリ、何ニトナレバ此等ノ不具ハ彼ノ獸類
ニ於テ完全ナルモノ人類ニ於テ不完全ナルノ
類ニアラズ、纔カニ男女兩性ハ中ニ在テ其別ヲ
明カニシ、一性ニ於テ完全ナルモ他ハ一性ニ於
テ不完全ナルモノナレバ、ナリ然レバ此不具ヲ
致セシ原由ヲ詳カニセント欲スレバ、彼ノ生物
各受造ヲ異ニスル謬說ノアルアリ、其難キヲ決

ノ前諸件ニ讓ラズ、總ジテ此不具ノ現存スルハ、即チ男女兩性中、一性ノ特質ノ幾分カ曾テ之ヲ他ノ一性ニ轉賦シ、殘ル部分ハ、故ノ如ク之ヲ保存シテ、連綿傳下セシ所以ナリ、請フ其例ノ一二ヲ述ン、抑哺乳類ノ男性ハ、人類ニ至ルマデ悉ク不具ナル乳房ヲ存セリ、動モスレバ完全ニ多量ノ乳液ヲ生ズルアリ、且麻疹等ニ罹リシキハ男女兩性ノ乳機孰レモ感染膨腫セリ、是レ其符合スル所以ナリ、マタ哺乳類中數種ノ男性ニ、シテスキューラ、プロスタチカトイフ中虛ニノ外ニ通

④千八百四十九年ヨリ同五十二年ニ至リ印行セル達德解判字典第四卷第一千四百十五葉ニ於ケル流加的ノ説ニ據ル〇此機關ノ人類ニ在ルハ、其長二分四厘乃至四分八厘許ナレド、其成長ト性質トニ至リテハ又他ノ不具物ノ如ク變化極

ズル小道ヲ具フル肉核アリ、是レ女性ニ定賦スル子宮ト同物ナリトノ輿論ニ歸セリ、此機關ニ係リテハ流加的ノ圖說論文等アリ、其論斷ノ公正ニノ結局ノ確實ナルハ感ズルニナホ餘アリ、哺乳類中子宮ノ女性ニ屬スルモノ、又狀ヲ成ス獸類ニ在テハ、其男性ニ屬スルモノマタ又狀ヲ成セリ、故ニ此等ノ獸類ヲ以テハ、其論殊ニ據ルベキアリ、其他生殖機ニ屬スル不具物ハナホ少ナシトセズ、

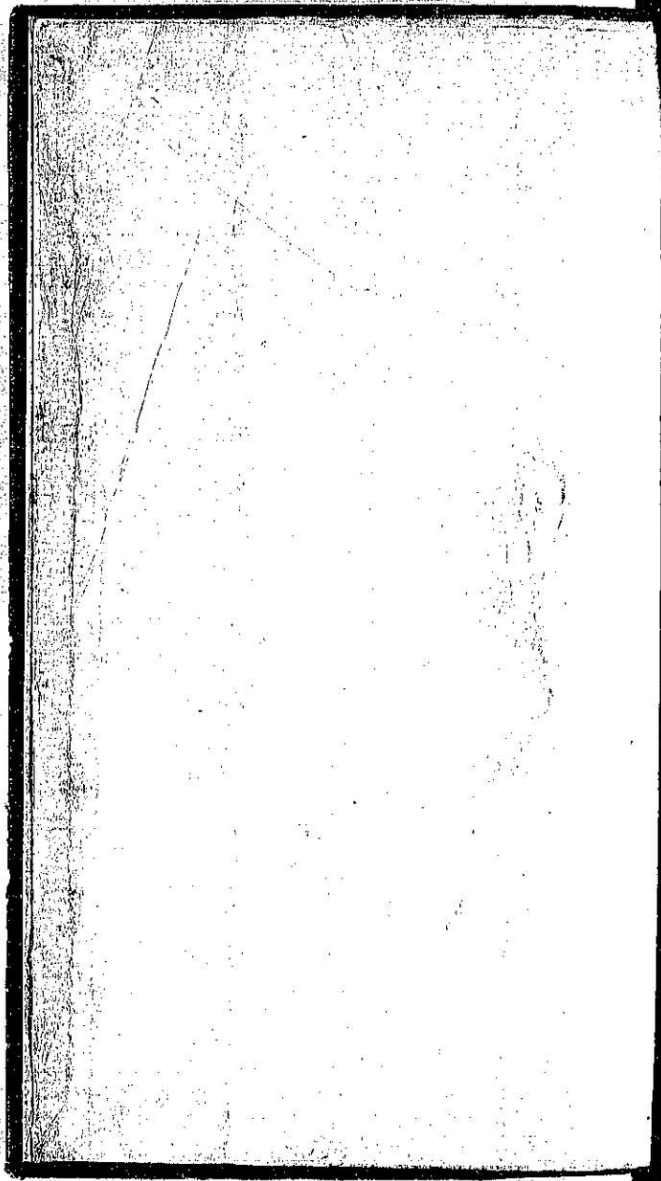
結論

ナシ、
 ① 腐蕪氏有脊
 骨動物解剖論
 第三卷第六百
 七十五同七十
 六同七百六葉
 ラ見ヨ、
 博士徹究格
 四年刊行進否
 四年刊行進否
 比較論六種々
 ノ類似造構ハ
 造法ト用テト
 齟齬セザル者
 ニテ各特殊ノ
 作工ナリトス、
 其論ノ巧妙ナ

以上ニ論ズルニ大實事ノ證據小確乎トノ動カ
 スベカラザル者ナリ、然レト雖モ更ニ之ヲ細説
 セザルハ蓋シ故アリ、余向ニ生物祖宗論ヲ以テ
 既ニコ、ニ論及シ、詳悉殆ンド遺ス所ナシ、因テ
 事ノ冗長ニ洩ルヲ欲セズ、抑彼此ノ生物身體造
 構ノ符合スルハ、是レ其祖先ヲ一ニスル所以ニ
 メ、而シテ小大ノ不同ハ遠ク祖先ヲ出デ千變萬化
 ノ境遇ニ適應セシ所以ナリ、モシソレ否ンバ人
 猿ノ手臂、馬ノ蹄、海狗ノ大翅、蝙蝠ノ羽翼等ノ如
 キ其模様一ニ出ルモノ、何ヲ以テカ之ヲ明カニ

欠

MISSING



7
3
///

